#### 『犬と猫の乳腺腫瘍について』

#### ~病理医から臨床家へのメッセージ~

獣医師、獣医学修士、米国獣医病理学専門医[解剖病理]

Oい いっき

三井 一鬼



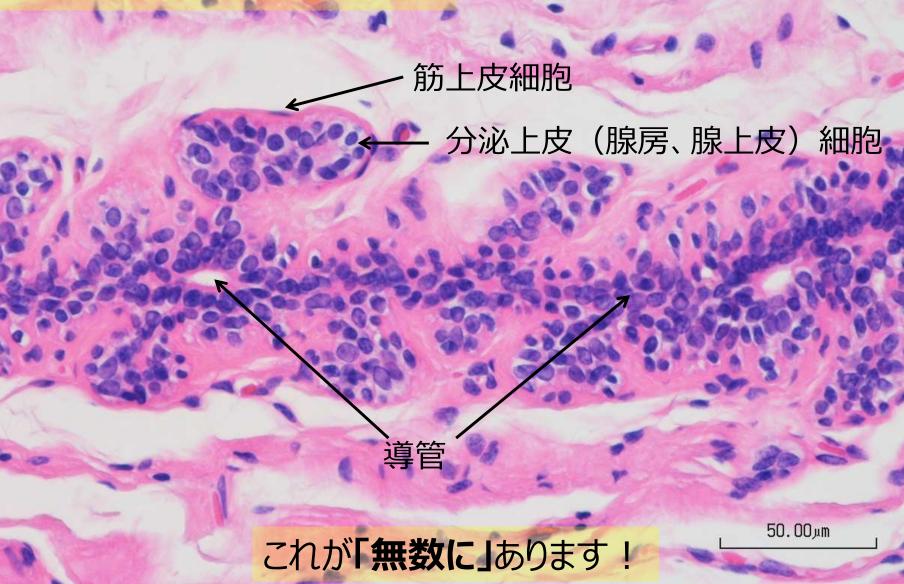
ノーバウンダリーズ

動物病理 No Boundaries
Animal Pathology, LLC

#### 腫瘍とは

- ●よく聞く言葉だが、定義は困難
- 分子生物学時代の定義: 「ひとつの細胞とそのクローン性の子孫に影響を及ぼす一連の 後天的な遺伝子変異がきっかけで生じる細胞増殖の異常」
- 良性腫瘍:局在性、転移しない、外科的切除で治癒する
- 悪性腫瘍:周囲組織へ浸潤し破壊する、遠隔転移によって死をもたらす
- 腫瘍学は膨大な研究・実践領域! (獣医学ではあまり深く教わることがないのが残念)

# 休止状態の乳腺組織

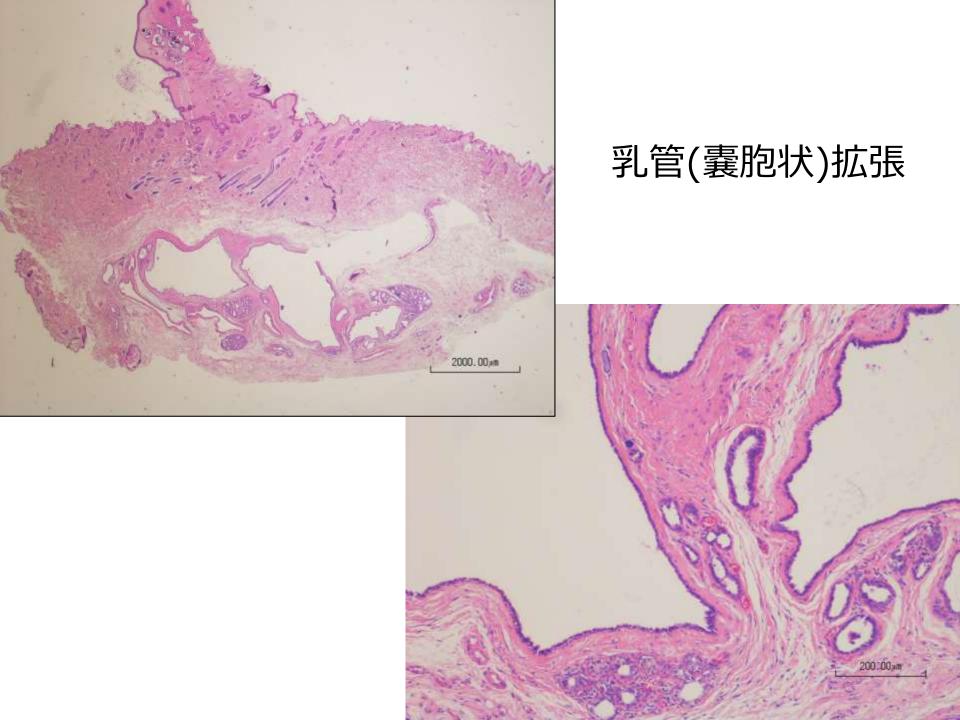


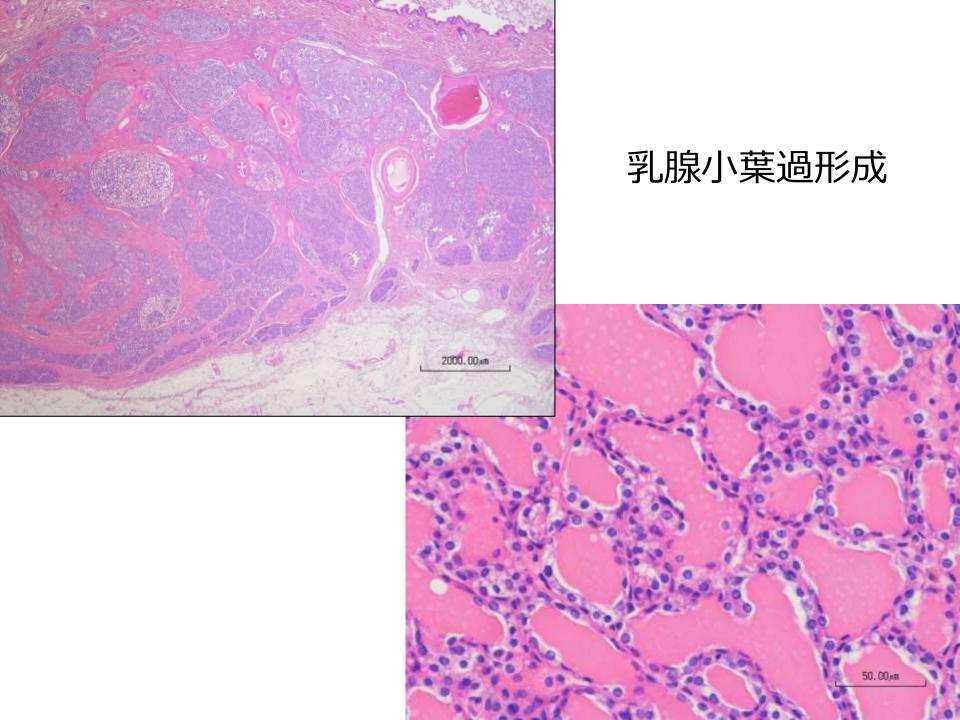
# 腫瘤、だけど、腫瘍じゃない①

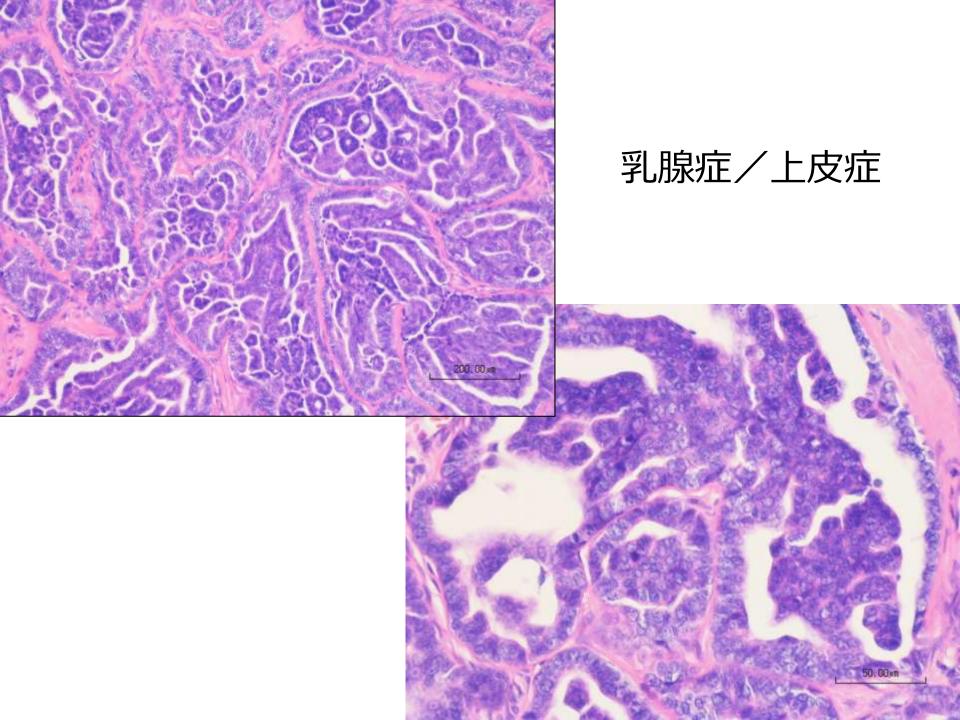
- 乳腺が増大するのは自然なこと
- エストロゲン、プロゲステロン、成長ホルモン、プロラクチン等の影響
- 乳管(囊胞状)拡張 Mammary (cystic) duct ectasia
- 乳腺肥大 Mammary hypertrophy (全乳腺)
- 乳腺小葉過形成(局所or多発性)には3つの発現様式
  - ①乳腺小葉過形成 Mammary lobular hyperplasia 分泌上皮が増殖。管腔に乳汁が充満。よくあるタイプ
  - ②乳腺症/上皮症 Adenosis/epitheliosis 管腔に上皮細胞が充満
  - ③線維腺腫様過形成 Fibroadenomatous hyperplasia 乳管と線維結合組織の著明な増生。圧倒的に猫で多い

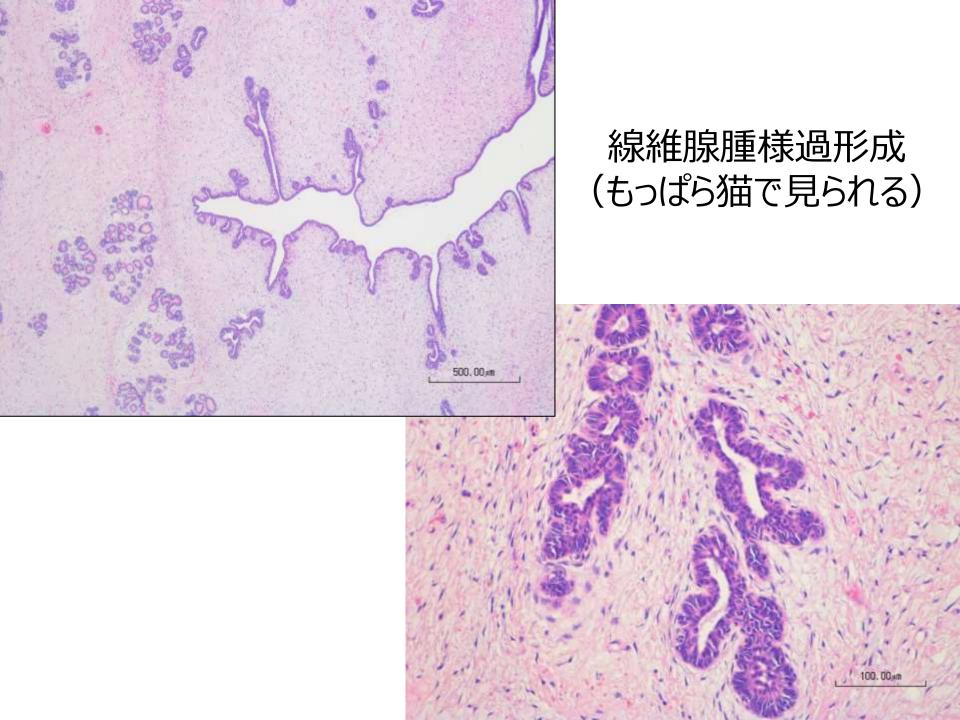
# 腫瘤、だけど、腫瘍じゃない②

- 見たり触ったりしただけでは細胞像、組織像はなかなかわからない
- ●細胞診をしてもよくわからないことがある(後述)
- ●なので摘出後に組織病理検査をする
- ●結果が腫瘍でなくても、それは仕方がありません (腫瘍でなくてよかったですね、というスタンス)
- ●非腫瘍性病変の組織像を見てみましょう









### 乳腺病変の進行

●過形成



● 異形成(前腫瘍性変化) 「異型性」とは違います…



●良性腫瘍



●悪性腫瘍

だから、放っておかないこと!

## 乳腺腫瘍の疫学 ~犬①~

- ●雌犬で最も多い悪性腫瘍
- ●年間発生率は198/10万頭
- ●正確な発生率や良悪比率は不明 理由:小型の良性腫瘍では来院・手術しない等
- ●摘出された腫瘍の約30%が悪性
- ●異形成や良性腫瘍は尾側乳腺で多い
- ●組織学的に異なる腫瘍が多数発生する傾向有

Tumors in domestic animals, 4th ed., p.575-606, Blackwell, 2002.

## 乳腺腫瘍の疫学~犬②~

#### ● 3大危険因子

- 1. 雌性ホルモンへの曝露と乳腺腫瘍の発生率
  - 初回発情までに避妊した雌犬の0.5%(病理の本では0.05%)
  - 2回目の発情までに~(同上)~8%(病理の本では0.8%)
  - 3回目の発情までに~(同上)~26%
  - ※2回目以降に関しては諸説あり
  - ※外国では雌性ホルモン製剤の影響も指摘されている
- 2. **年齢**:悪性腫瘍は9~11歳で、良性腫瘍は7~9歳で多い
- 3. **品種**:いくつかの犬種が好発とされているが、遺伝子検査が 進めばわかることが増えるだろう

Small Animal Clinical Oncology, 5th ed., p.538-556, Elsevier, 2013.

## 乳腺腫瘍の疫学 ~猫①~

- ●皮膚腫瘍、リンパ腫に次いで多い
- ●年間発生率は25.4/10万頭(雌猫)
- ●病変が初めて検出されるのは10~11歳(2.5)~13歳)
- ●悪性と良性の比率は9:1や4:1
- ●組織学的に類似あるいは異なる腫瘍が多数発生することが比較的多い

Tumors in domestic animals, 4th ed., p.575-606, Blackwell, 2002.

## 乳腺腫瘍の疫学 ~猫②~

- 3大危険因子は犬と同様
  - 1. 雌性ホルモンへの曝露と乳腺腫瘍予防効果
    - 6ヶ月齢以前に避妊した雌猫の91%で乳腺腫瘍のリスクが減少
    - 7~12ヶ月齢で避妊~(同上)~86%~(同上)~
    - 13~24ヶ月齢で避妊~(同上)~11%~(同上)~
    - 24ヶ月齢以降で避妊した場合の利益は認められなかった
    - ※外国では雌性ホルモン製剤の影響も指摘されている
  - 2. 年齢:乳腺腫瘍が診断される平均年齢は10~12歳の間
  - 3. **品種**:シャム猫(この猫種では他の腫瘍も好発するが)

Small Animal Clinical Oncology, 5th ed., p.538-556, Elsevier, 2013.

## 乳腺腫瘍の疫学 ~品種~

●犬

高リスク:ダックスフント、ポインター

低リスク:コリー、ボクサー

●猫

高リスク:シャム猫

Tumors in domestic animals, 4th ed., p.575-606, Blackwell, 2002.

● 大型犬で小型犬よりも悪性腫瘍が多い

Itoh et al., J Vet Med Sci 67:345-347, 2005.

#### 乳腺腫瘍はホルモンに密接に関係した腫瘍

- ●発情中、乳腺は過形成化(エストロゲン、プロ ゲステロン)
- ●セルトリ細胞腫で雄犬の乳腺過形成化
- ●犬と猫では早期避妊で悪性腫瘍の発生減
- ●犬では避妊手術の時期が遅れても乳腺良性腫 瘍の発生は減
- ●プロゲステロン製剤を常用する猫で良悪の腫瘍 の発生リスク高

Tumors in domestic animals, 4th ed., p.575-606, Blackwell, 2002.

### 「雄」犬の乳腺腫瘍

- ●18頭の雄犬(去勢済み15頭)の27個の腫瘍
- 7頭がコッカースパニエル
- ●26個が単純腺腫、1個が複合腺腫
- ●肥満、精巣腫瘍、性ホルモン治療の履歴無
- ●過去の報告では悪性が半数以上
- おそらく「悪性」の定義が違ったから?
- ●去勢の有無も過去の報告では不明

Bearss et al., Vet Pathol 49(4):602-607, 2012.

### 逸話的なエビデンス① ~良性と悪性の比率はどうなの?~

日本の民間病理検査施設において悪性とされた腫瘍の割合(1頭に複数存在の場合、1個でも悪性があれば悪性として計数)

施設	犬 (症例数)	猫(症例数)	備考
Α	<b>23%</b> (2,141)	<b>95%</b> (295)	
В	<b>21.6%</b> (4,121)	<b>80.3%</b> (590)	犬悪性の18.2%で脈 管内浸潤あり
С	<b>20.1%</b> (149)	<b>94.1%</b> (136)	
D	<b>60.5%</b> (55,525)	<b>79.6%</b> (6,629)	
E	<b>14.5%</b> (200)	<b>96.4%</b> (192)	

### 逸話的なエビデンス② ~Mダックスフントに悪性が多い?~

#### 前掲の検査施設Bにおける集計

アニコム家庭どうぶつ白書2012

良性	866個	%
M.ダックス	293	33.8
Mix	74	8.5
トイ・プードル	59	6.8
シーズー	52	6.0
チワワ	47	5.4
ヨークシャー・テリア	46	5.3
マルチーズ	37	4.3
パピョン	35	4.0
W.コーギー	33	3.8
柴	25	2.9
他	165	19.1

悪性	889個	%
M.ダックス	181	20.4
Mix	125	14.1
シーズー	61	6.9
W.コーギー	56	6.3
柴	46	5.2
スパニエル	43	4.8
L.レトリーハ゛ー	34	3.8
G.レトリーバー	33	3.7
パピョン	31	3.5
ビーグル	29	3.3
他	250	28.9

人気品種	頭数	%
M.ダックス	50,341	16.8
チワワ	46,424	15.5
トイ・プードル	45,393	15.1
柴	14,656	4.9
Mix (10kg未満)	12,542	4.2
ヨークシャー・テリア	10,625	3.5
ポメラニアン	9,369	3.1
W.コーギー	9,034	3.0
パピョン	8,973	3.0
シー・ズー	8,240	2.7
計	299,648	100

## 疫学データを読むときの留意点

- ●地域や時代によって早期避妊率や品種の構成にばらつきがあるのではないか
- ●乳腺腫瘍は他の腫瘍に比べてホルモンの影響を 強く受ける
- ●病理診断医間で良悪判定にばらつきがある



データを鵜呑みにせず、背景に思いを馳せること!

#### 乳腺腫瘍の病理学 ~WHO分類 犬~

#### 1 Malignant tumors

- 1.1 Noninfiltrating (in situ) carcinoma
- 1.2 Complex carcinoma
- 1.3 Simple carcinoma
  - 1.3.1 Tubulopapillary carcinoma
  - 1.3.2 Solid carcinoma
  - 1.3.3 Anaplastic carcinoma
- 1.4 Special types of carcinomas
  - 1.4.1 Spindle cell carcinoma
  - 1.4.2 Squamous cell carcinoma
  - 1.4.3 Mucinous carcinoma
  - 1.4.4 Lipid-rich carcinoma
- 1.5 Sarcoma
  - 1.5.1 Fibrosarcoma
  - 1.5.2 Osteosarcoma
  - 1.5.3 Other sarcomas
- 1.6 Carcinosarcoma
- 1.7 Carcinoma or sarcoma in benign tumor

#### 2 Benign tumors

- 2.1 Adenoma
  - 2.1.1 Simple adenoma
  - 2.1.2 Complex adenoma
  - 2.1.3 Basaloid adenoma
- 2.2 Fibroadenoma
  - 2.2.1 Low-cellularity fibroadenoma
  - 2.2.2 High-cellularity fibroadenoma
- 2.3 Benign mixed tumor
- 2.4 Duct papilloma
- 3 Unclassified tumors
- 4 Mammary hyperplasias/dysplasias
  - 4.1 Ductal hyperplasia
  - 4.2 Lobular hyperplasia
    - 4.2.1 Epithelial hyperplasia
    - 4.2.2 Adenosis
  - 4.3 Cysts
  - 4.4 Duct ectasia
  - 4.5 Focal fibrosis (fibrosclerosis)
  - 4.6 Gynecomastia

## 乳腺腫瘍の日本語名は 日本獣医学会病理学分科会HPへ http://ttjsvs.org/who.html



目次ページへ戻る

動物腫瘍のWHO組織学的分類

2015年9月 日本獣医学会病理学分科会

病理組織診断書や病理学的なレポートを書く際には、種々の学術書を参考にするが、その場合、苦慮する場面に多々遭遇する。それは参考とする学術書の多くが洋書で、 対応する日本語訳がない用語が存在するからである。ヒトの医学書に類似した英名が存在する場合は、その訳語を参考にすれば良いが、動物専門用語の場合、各人で日本語訳を決定する必要があり、その訳語が一般的なものとなっているか疑念を抱くことが多い。近年は獣医病理学用語集(日本獣医病理学会)や日本獣医学会疾患名用語集(日本獣医学会)をすぐに参照できるようになったが、腫瘍の診断名を包括した日本語訳がなく、腫瘍診断業務の側面からは不十分と考える。

日本獣医病理学会では2001年から連続して腫瘍診断基準策定委員会担当のセミナーが開催されており、その内容はWHO腫瘍分類に準じている。このようなことから、本委員会において、WHO腫瘍分類に対する日本語訳を作成し、その用語を広く提案することになった。ヒトでも各腫瘍の「取り扱い規約」で使われる診断名と教科書等で使われている診断名が異なる場合があるように、訳語を唯一無二と考えることはないが、ひとつの基準あるいは苦慮した際の拠り所として、腫瘍診断基準策定委員会が検討した日本語の診断名を提案することにした。

最終的に多くの方々に支持される訳語を策定することが重要であり、多くの学会会員から本提案に対する 御意見が寄せられることを期待する。 以下の日本語訳委員会案をダウンロードしていただき、多くの皆様のコメントをお寄せ下さい。

Excelファイルタウンロード 動物腫瘍のWHO組織学的分類2015年分)

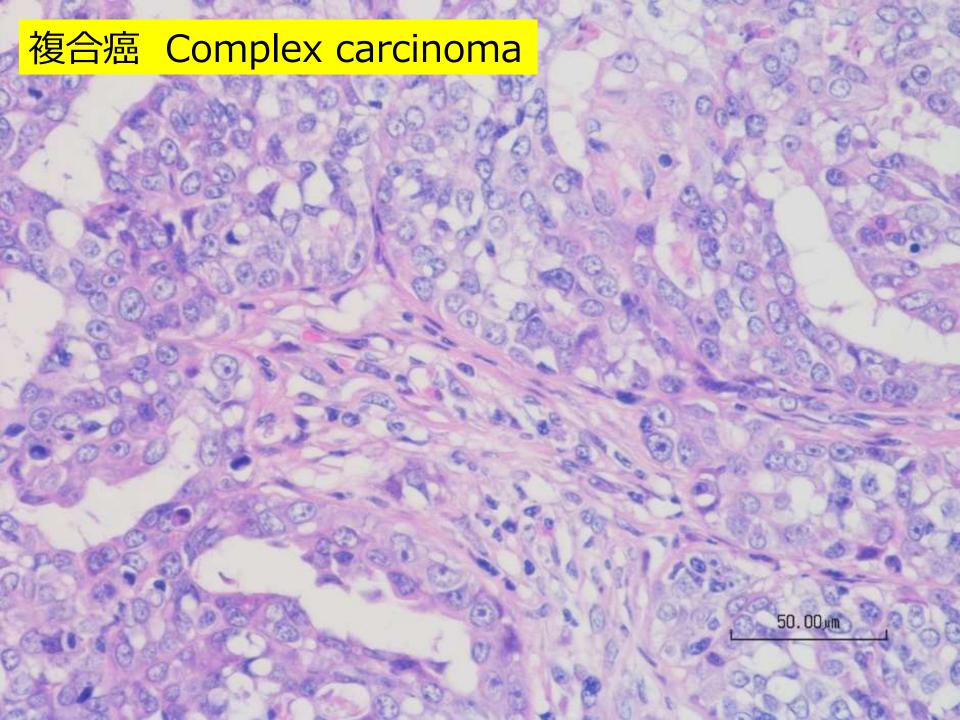
目次ページへ戻る

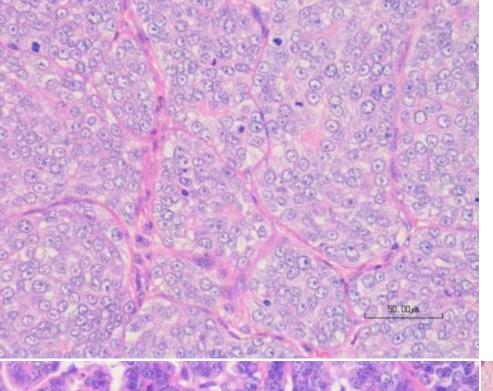
↑ページ先頭へ

#### 絶対知っておきたい!

### 陰の主役「筋上皮細胞」

- 犬の乳腺腫瘍で特に目立つ
- ●腫瘍の周囲組織への浸潤や転移に抑制効果を持つと 言われている
  - -分泌上皮細胞の間質への浸潤をブロック?
- 名前に「筋上皮」「複合 complex」や「混合 mixed」 が入る腫瘍は、筋上皮が増殖
  - →悪性腫瘍の場合の浸潤性・転移性が「単純 simple」型の腫瘍より低い傾向がある
- ◆ 犬で「乳腺腺癌」という診断名がついたら診断医に確認すること(筋上皮の増殖やその良悪がわからない)





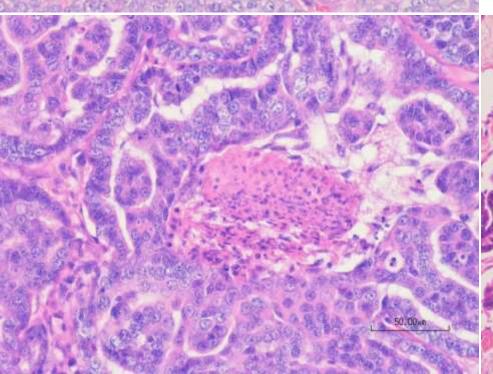
左上:充実癌

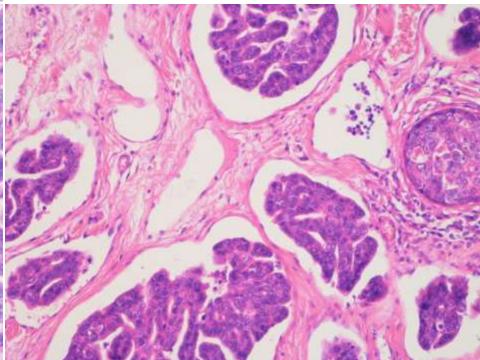
Simple carcinoma (solid)

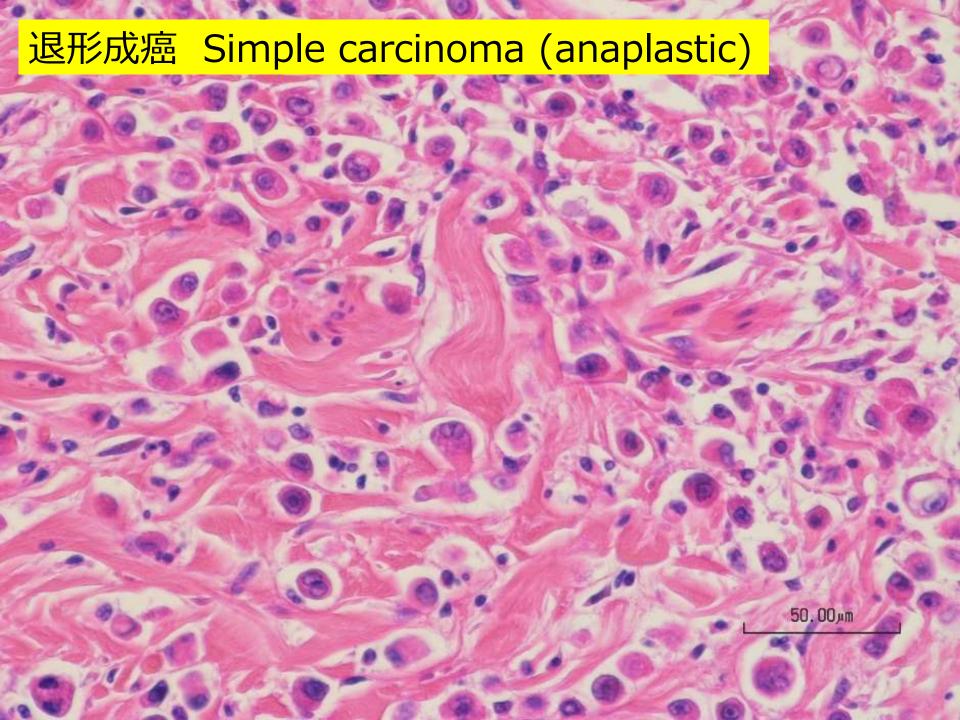
左下:管状乳頭状癌

Simple carcinoma (tubulopapillary)

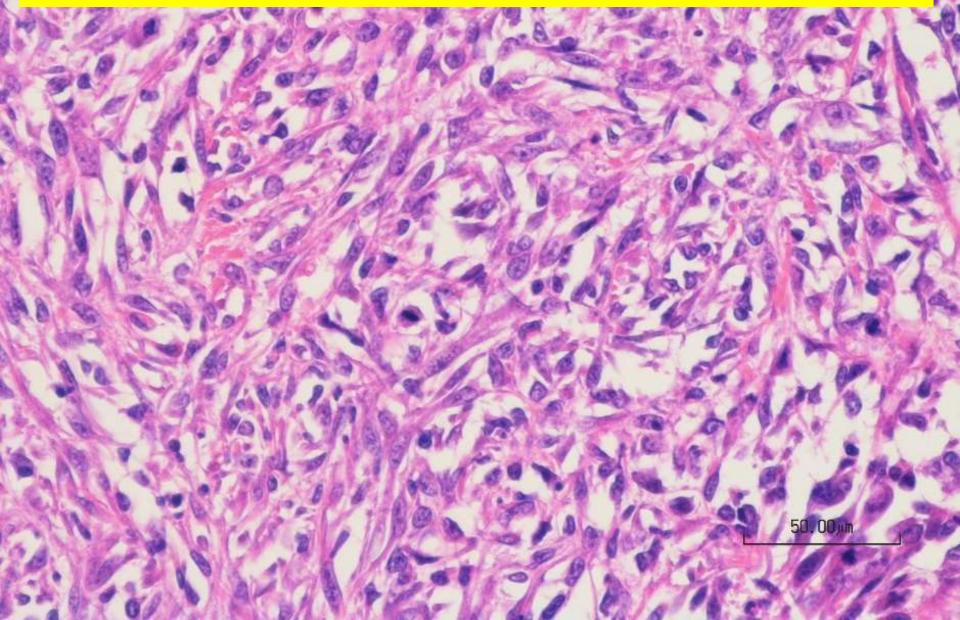
右下:リンパ管浸潤像

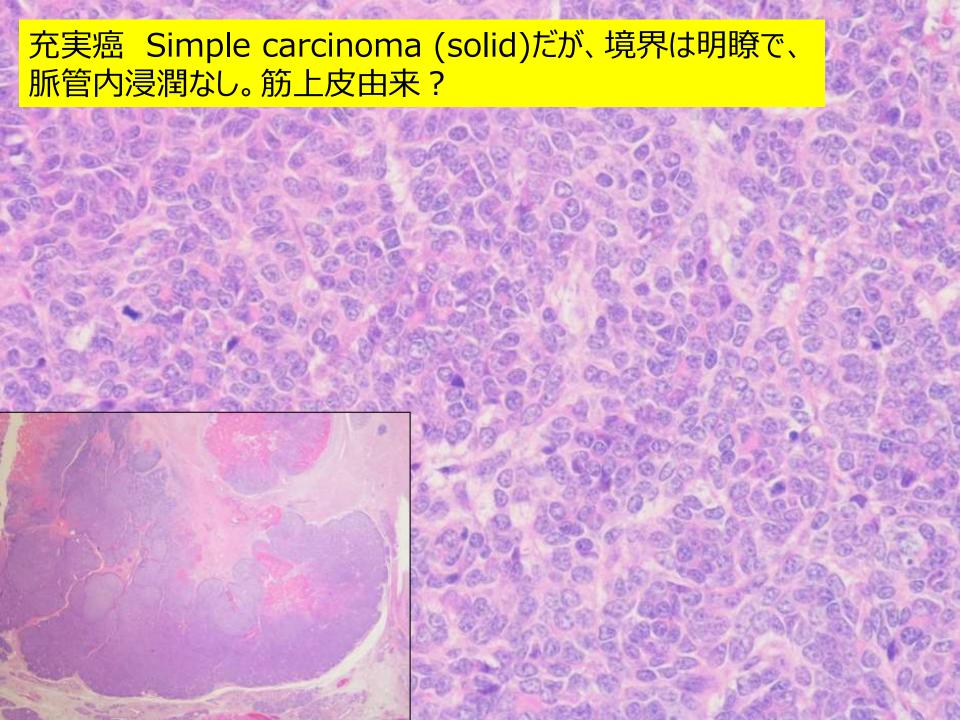






紡錘形細胞癌 Spindle cell carcinoma (本症例は脈管内浸潤 とリンパ節転移を伴っていた





#### 「筋上皮細胞は味方だよ」という論文

#### Differences in Indicators of Malignancy Between Luminal Epithelial Cell Type and Myoepithelial Cell Type of Simple Solid Carcinoma in the Canine Mammary Gland

Veterinary Pathology 2014, Vol. 51(6) 1090-1095 © The Author(s) 2014 Reprints and permission: sagepub.com/journalsPermissions.nav DOI: 10.1177/0300985813516637 vet.sagepub.com

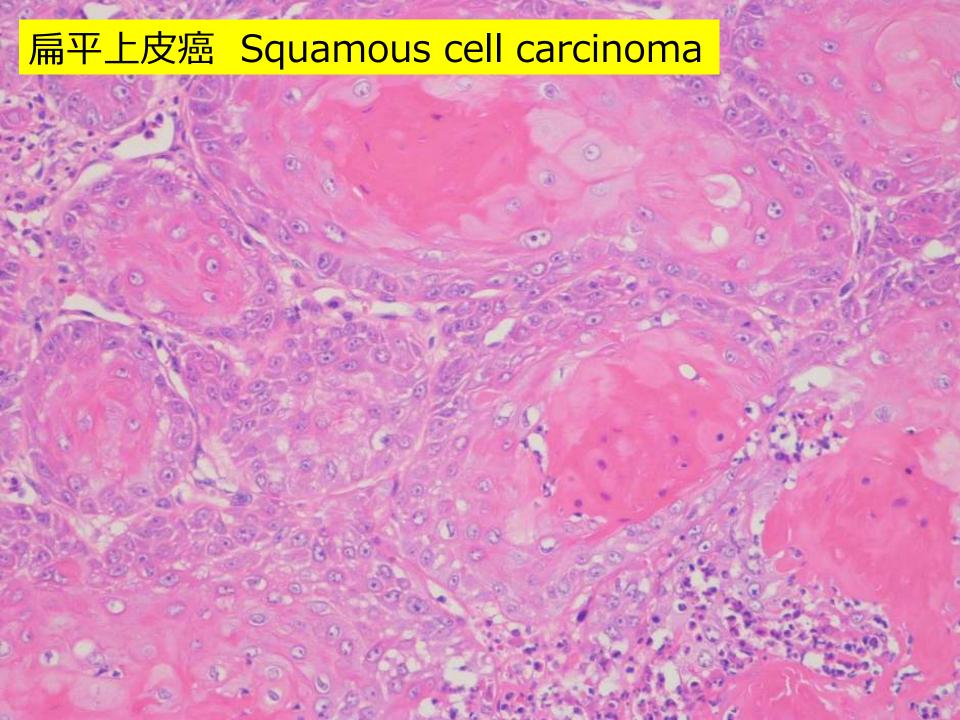


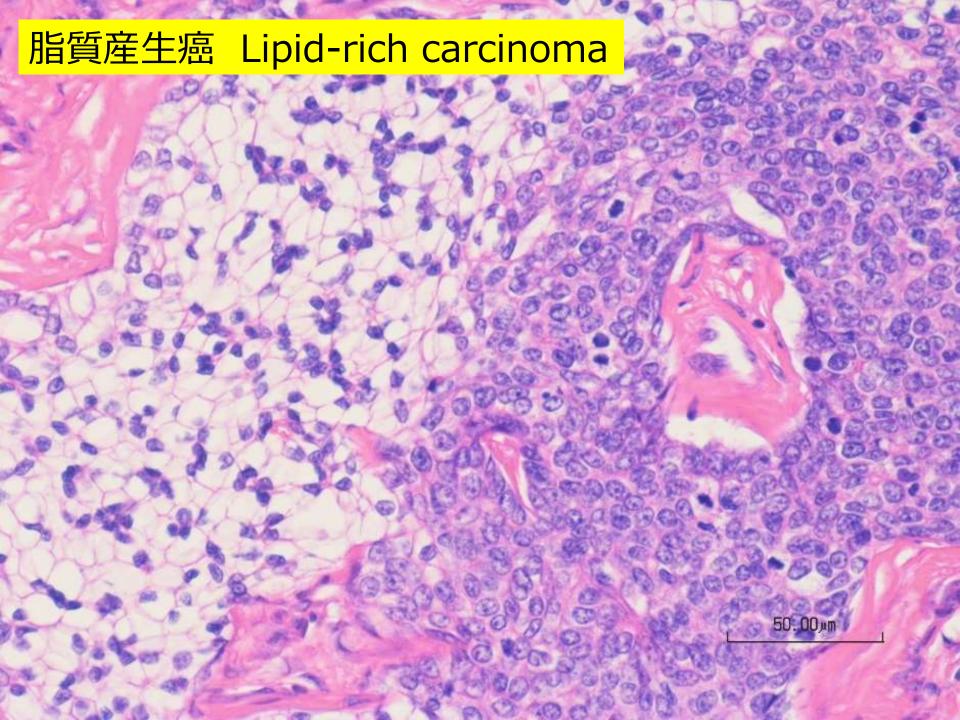
H. Yoshimura<sup>1</sup>, R. Nakahira<sup>1</sup>, T. E. Kishimoto<sup>1</sup>, M. Michishita<sup>1</sup>, K. Ohkusu-Tsukada<sup>1</sup>, and K. Takahashi<sup>1</sup>

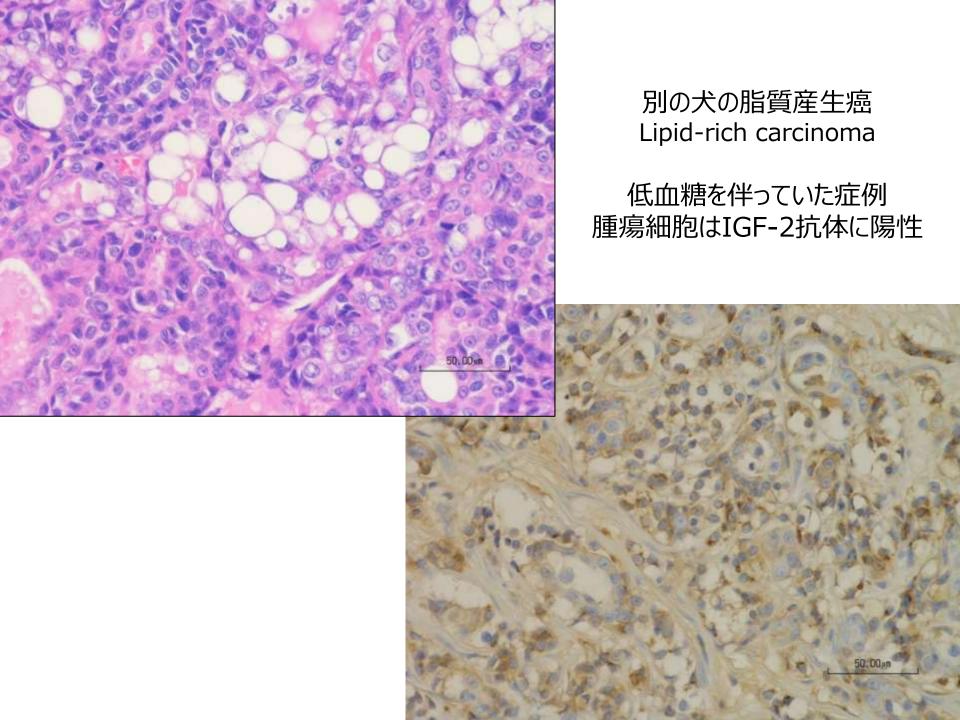
#### **Abstract**

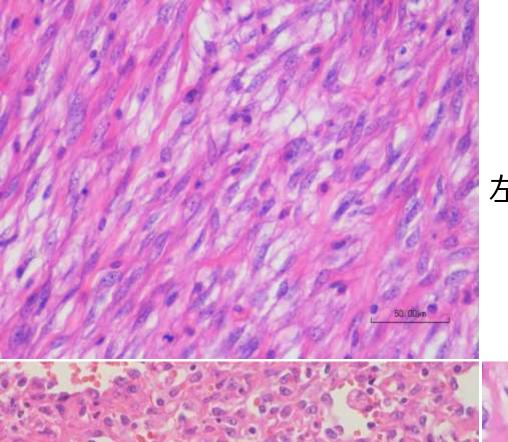
Routinely diagnosed simple solid carcinoma (SSC) of the canine mammary gland comprises a heterogeneous group of tumors. Seventy-two cases that had been diagnosed as SSC based on hematoxylin and eosin–stained tissue sections were reclassified immunohistochemically on the basis of myoepithelial markers p63 and α-smooth muscle actin, as well as a luminal epithelial marker cytokeratin 8. Only 23 cases (32%) were true SSC, composed only of luminal epithelial cells, whereas 11 cases (15%) were malignant myoepithelioma (MM), composed predominantly of myoepithelial cells, and 38 cases (53%) were biphasic carcinoma (BC), characterized by biphasic proliferation of luminal epithelial and basal/myoepithelial components. As the pathological parameters were compared between the reclassified tumor types, infiltrative potential, vascular/lymphatic invasion, lymph node metastasis, and Ki-67 labeling index were higher in true SSC compared with MM and BC, suggesting that the former may exhibit a poorer prognosis compared with the latter two.

HE染色では分類に限界があるため、免疫染色を行って腫瘍の真の姿を明らかにすることが望ましい(費用の問題はあるが・・・)





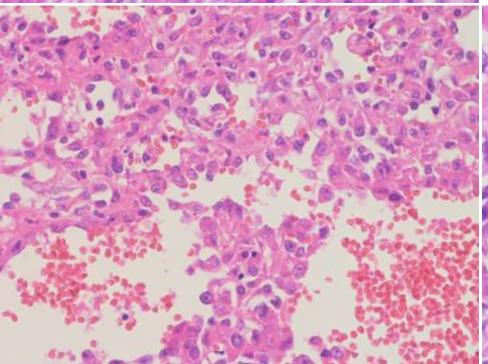


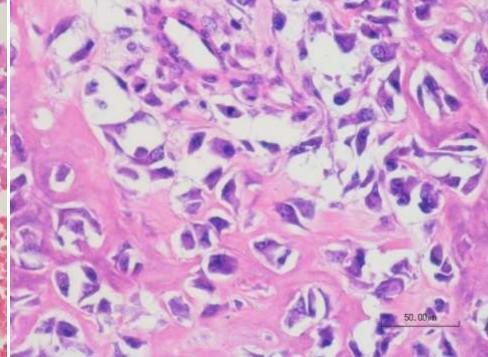


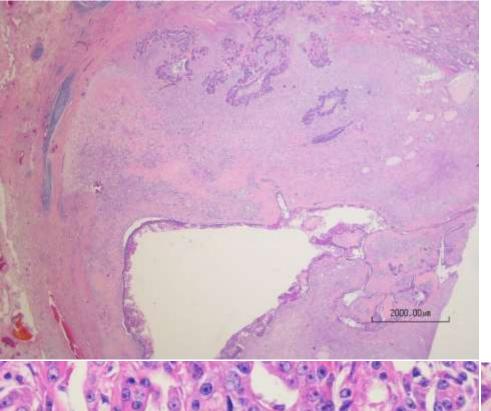
左上:線維肉腫 Fibrosarcoma

左下:血管肉腫 Hemangiosarcoma

右下:骨肉腫 Osteosarcoma







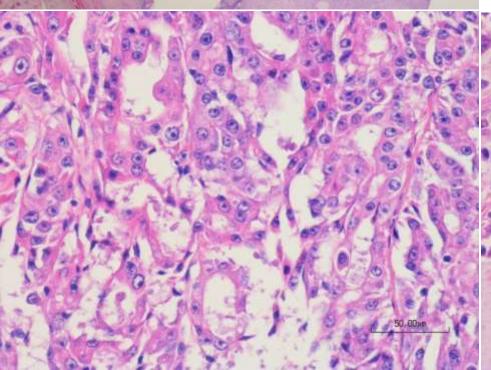
#### 癌肉腫 Carcinosarcoma

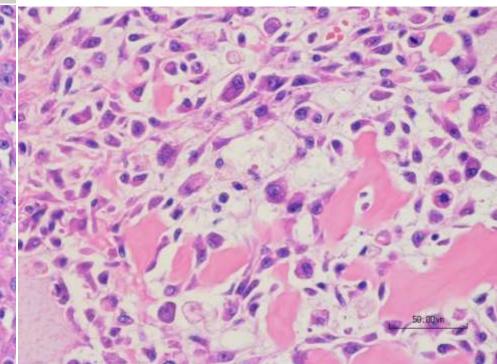
左上: 低倍像

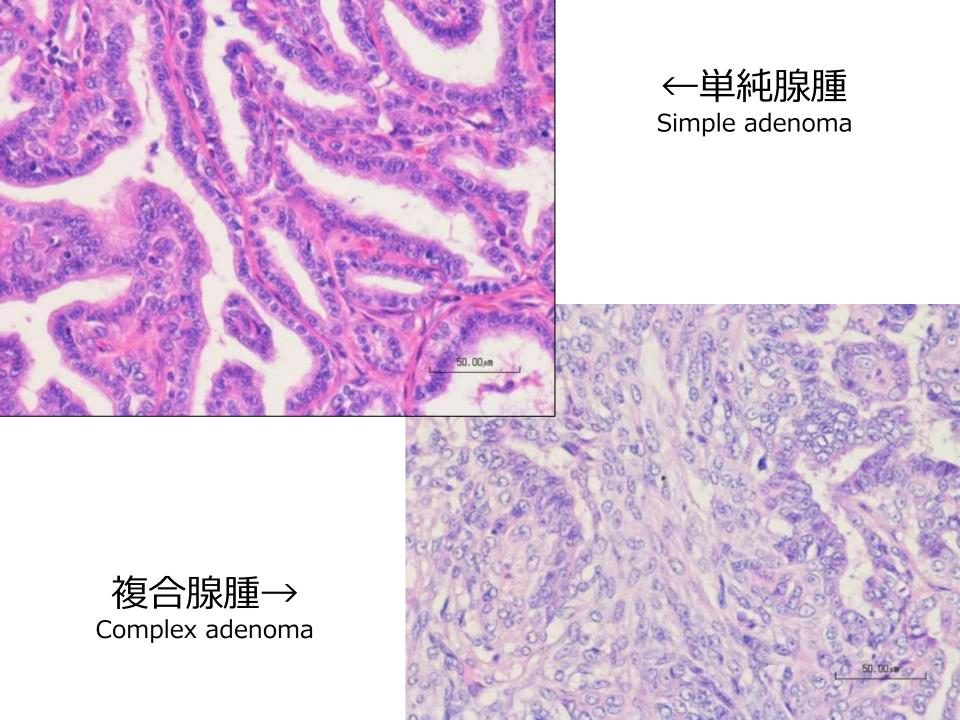
左下:癌腫の部分

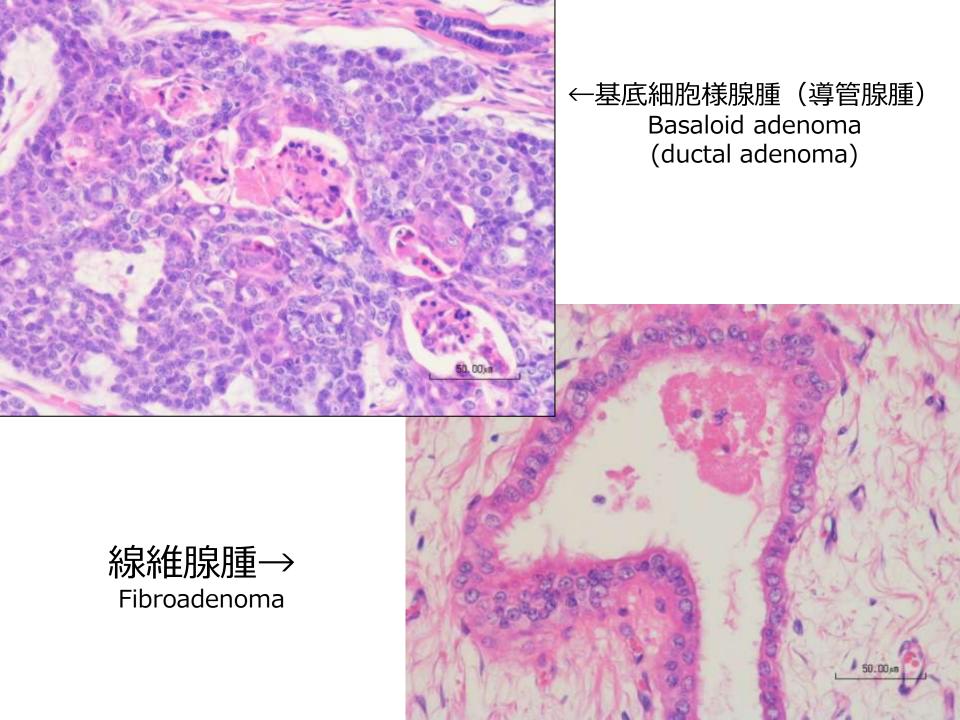
右下:肉腫(骨肉腫)の部分

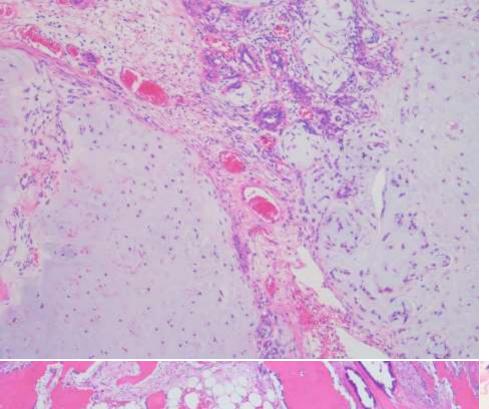
本症例はリンパ節転移とリンパ管浸潤を伴っていた



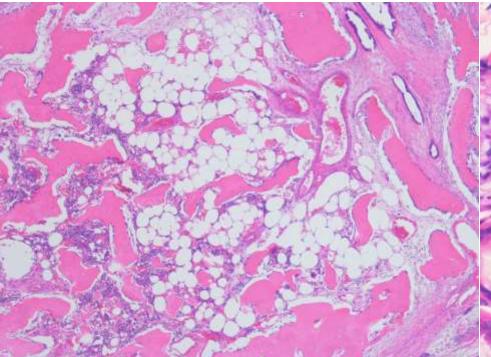


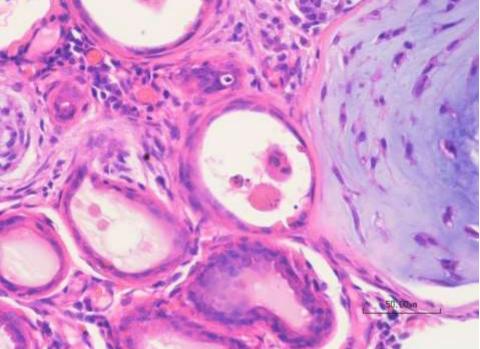


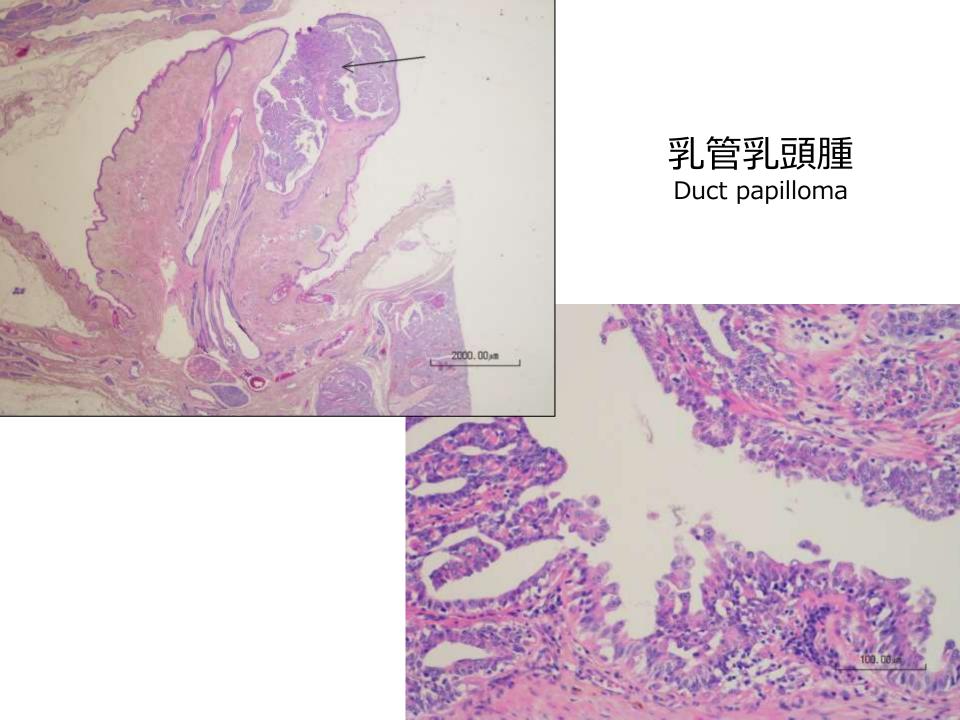




良性混合腫瘍 Benign mixed tumor







## 乳腺腫瘍の病理学 ~WHO分類 猫~

#### 1 Malignant tumors

- 1.1 Noninfiltrating (in situ) carcinoma
- 1.2 Tubulopapillary carcinoma
- 1.3 Solid carcinoma
- 1.4 Cribriform carcinoma
- 1.5 Squamous cell carcinoma
- 1.6 Mucinous carcinoma
- 1.7 Carcinosarcoma
- 1.8 Carcinoma or sarcoma in benign tumor

#### 2 Benign tumors

- 2.1 Adenoma
  - 2.1.1 Simple adenoma
  - 2.1.2 Complex adenoma
- 2.2 Fibroadenoma
  - 2.2.1 Low-cellularity fibroadenoma
  - 2.2.2 High-cellularity fibroadenoma
- 2.3 Benign mixed tumor
- 2.4 Duct papilloma

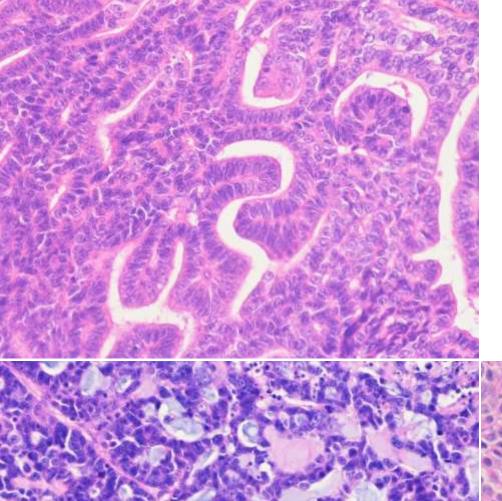
#### 3 Unclassified tumor

- 4 Mammary hyperplasias/dysplasias
  - 4.1 Ductal hyperplasia
  - 4.2 Lobular hyperplasia
    - 4.2.1 Epithelial hyperplasia
    - 4.2.2 Adenosis
    - 4.2.3 Fibroadenomatous change (feline mammary hypertrophy, fibroepithelial hypertrophy)
  - 4.3 Cysts
  - 4.4 Duct ectasia
  - 4.5 Focal fibrosis (fibrosclerosis)

# 猫の乳腺腫瘍分類の注意点

- ●筋上皮が増殖することは稀
- ●癌 Carcinoma に複数の亜分類があるが、分類して予後に影響があるというエビデンスに乏しいため、分類しない病理医が殆ど(分類してほしいと言っていただければします)

Pathology of domestic animals, 6th ed., Vol.3, p.459-464, Elsevier, 2015.



癌 Carcinoma

左上:管状乳頭状癌

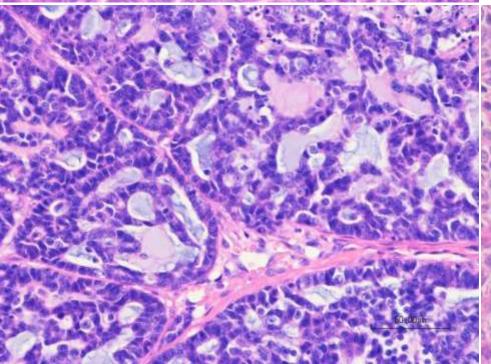
Tubulopapillary

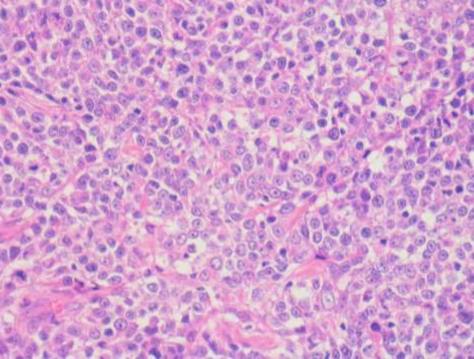
左下:篩状癌

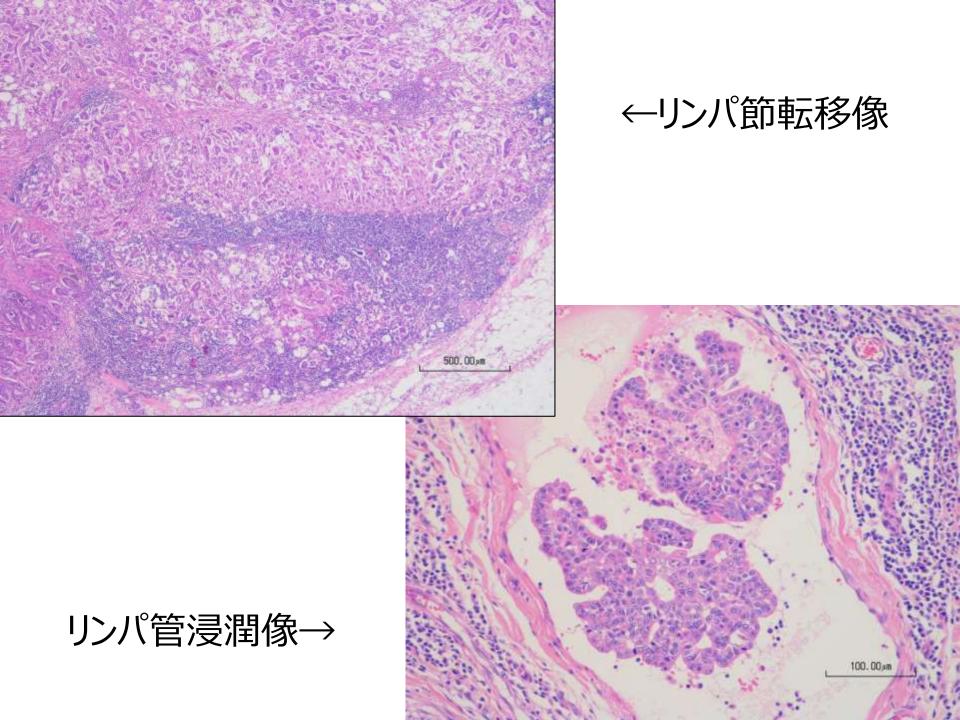
Cribriform

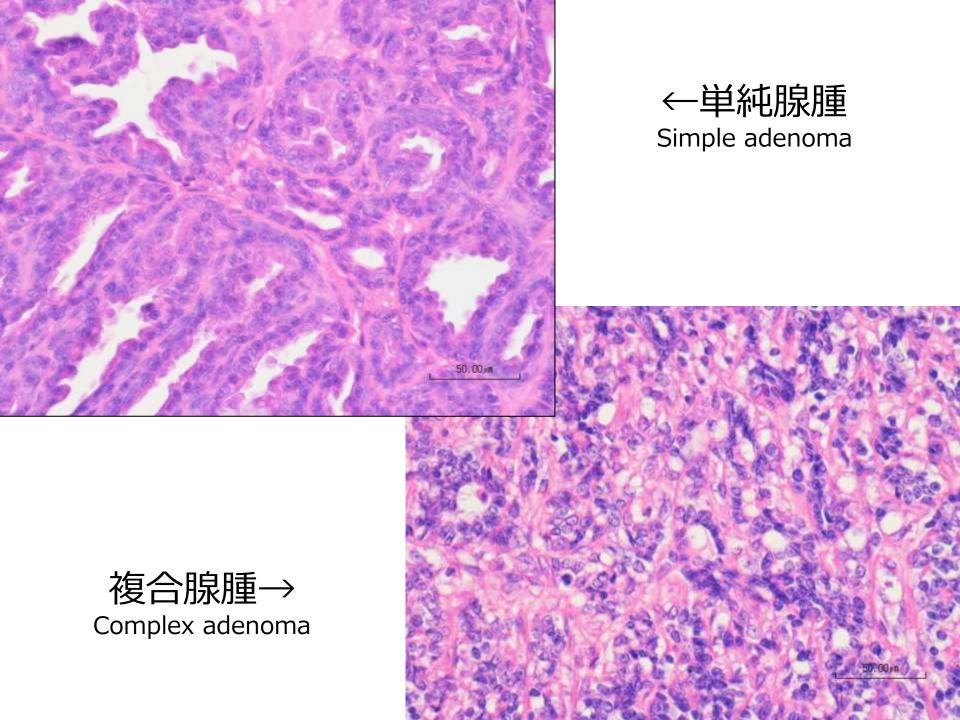
右下:充実癌

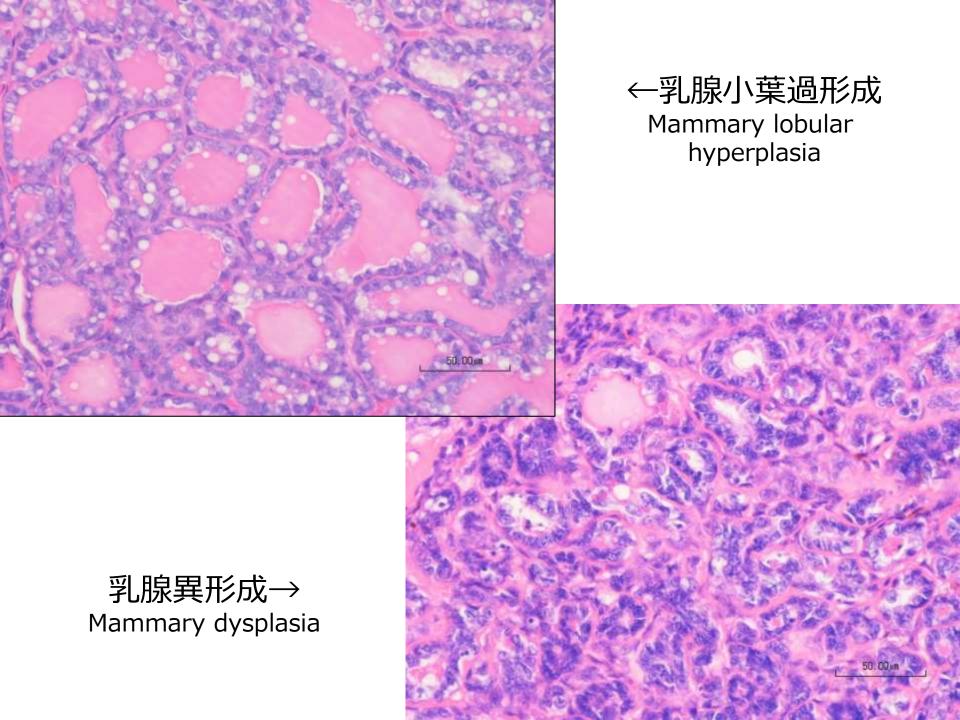
Solid



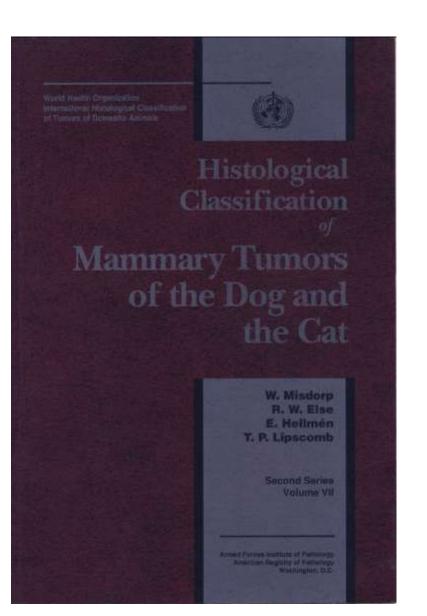




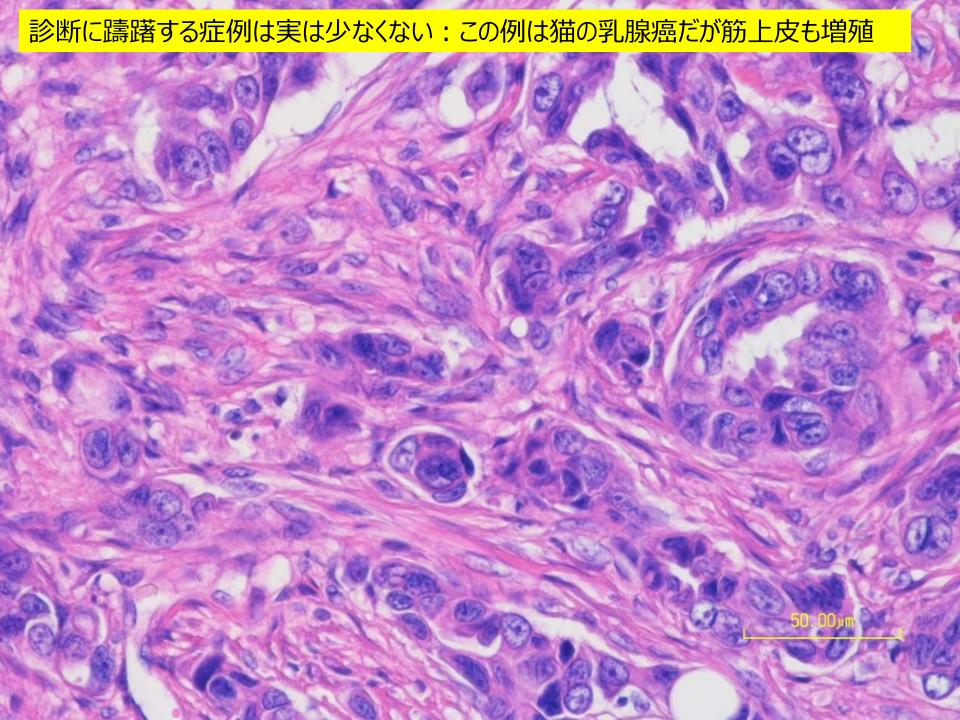




# WHO分類の問題点



- ●1999年発行「古い!」
- ●早期避妊が一般的な国の データに準拠
- ●実情に合っていない
  - -分類不能例が多い
  - -新タイプの報告相次ぐ
  - -臨床との乖離
- 近年、改定を望む声が高 まっている



# 犬の乳腺腫瘍で、分泌上皮も筋上皮も悪性の場合どう呼んだらいい?

# 病理診断って何だろう?

- 診断名を付ける=細分類する
- しっかり分類することで治療への反応性 や予後の情報がきめ細かく、正確になる
- いい加減な診断のツケは案外大きい (その患者さんのみならず、後世にも 悪影響を及ぼす)

# 犬の乳腺腫瘍の 「これからの」 ゴールドスタンダード

#### Classification and Grading of Canine Mammary Tumors

M. Goldschmidt<sup>1</sup>, L. Peña<sup>2</sup>, R. Rasotto<sup>3</sup>, and V. Zappulli<sup>3</sup>

Veterinary Pathology 48(1) 117-131 © The American College of Veterinary Pathologists 2011 Reprints and permission: sagepub.com/journalsPermissions.nav DOI: 10.1177/0300985810393258 http://vet.sagepub.com



#### **Abstract**

Mammary neoplasms are the most common neoplasm in female dogs. Two histologic classification systems for canine mammary tumors and dysplasias have been published: the first in 1974 and a modification in 1999. This article provides a brief overview of the two histologic classification systems. Since the publication of the second system, several new histologic subtypes of canine mammary neoplasms have been described. These have been incorporated into the proposed new classification system. This article also compares the grading systems for canine mammary carcinomas and their use for prognosis, along with the histologic classification.

#### Keywords

canine, classification, dysplasia, grading, mammary, neoplasia

#### Proposed Histologic Classification: 2010 (Goldschmidtらの2010年提唱分類)

#### 1: Malignant Epithelial Neoplasms

Carcinoma-in situ

Carcinoma-simple

- a. Tubular
- b. Tubulopapillary
- c. Cystic-papillary
- d. Cribriform

Carcinoma micropapillary invasive

Carcinoma-solid

Comedocarcinoma

Carcinoma-anaplastic

Carcinoma arising in a complex adenoma/mixed tumor

—The benign counterpart is still detectable in the section.

Carcinoma-complex type

—The epithelial component is malignant, and the myoepithelium is benign.

Carcinoma and malignant myoepithelioma

—The epithelial and myoepithelial components are malignant.

Carcinoma-mixed type

—The epithelial component is malignant; the myoepithelial mesenchymal component is benign; and the mesenchymal component is cartilage or bone.

Ductal carcinoma—malignant counterpart of ductal adenoma Intraductal papillary carcinoma—malignant counterpart of intraductal papillary adenoma 2: Malignant Epithelial Neoplasms—Special Types

Squamous cell carcinoma

Adenosquamous carcinoma

Mucinous carcinoma

Lipid-rich (secretory) carcinoma

Spindle cell carcinomas

Malignant myoepithelioma

Squamous cell carcinoma-spindle cell variant

Carcinoma-spindle cell variant

Inflammatory carcinoma (see Inflammatory Carcinoma section)

3: Malignant Mesenchymal Neoplasms—Sarcomas

Osteosarcoma

Chondrosarcoma

Fibrosarcoma

Hemangiosarcoma

Other sarcomas

4: Carcinosarcoma—Malignant Mixed Mammary Tumor

Goldschmidt et al., *Vet Pathol* 48(1) 117-131, 2011.

#### Goldschmidtらの2010年提唱分類(続)

5: Benign Neoplasms

7: Neoplasms of the Nipple

Adenoma-simple

Adenoma Carcinoma

Intraductal papillary adenoma (duct papilloma<sup>9</sup>)

Carcinoma with epidermal infiltration (Paget-like disease)

Ductal adenoma (basaloid adenoma)

With squamous differentiation (keratohyaline granules)

Fibroadenoma

Myoepithelioma

Complex adenoma (adenomyoepithelioma)

Benign mixed tumor

8: Hyperplasia/Dysplasia of the Nipple

Melanosis of the skin of the nipple

#### 6: Hyperplasia/Dysplasia

Duct ectasia

Lobular hyperplasia (adenosis)

Regular

With secretory activity (lactational)

With fibrosis-interlobular fibrous connective tissue

With atypia

Epitheliosis

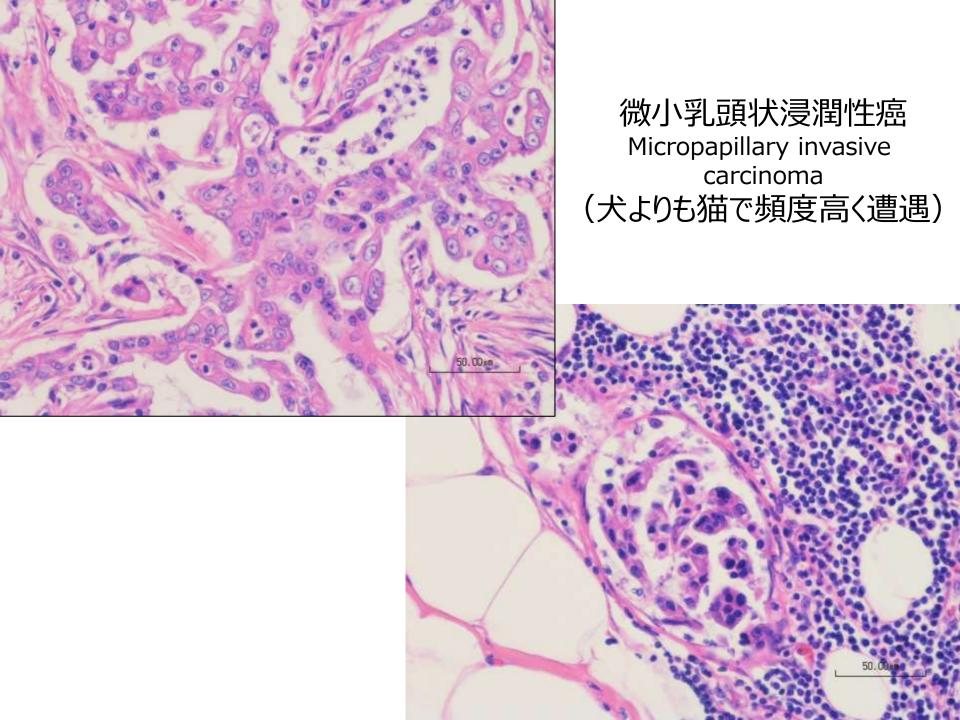
Papillomatosis

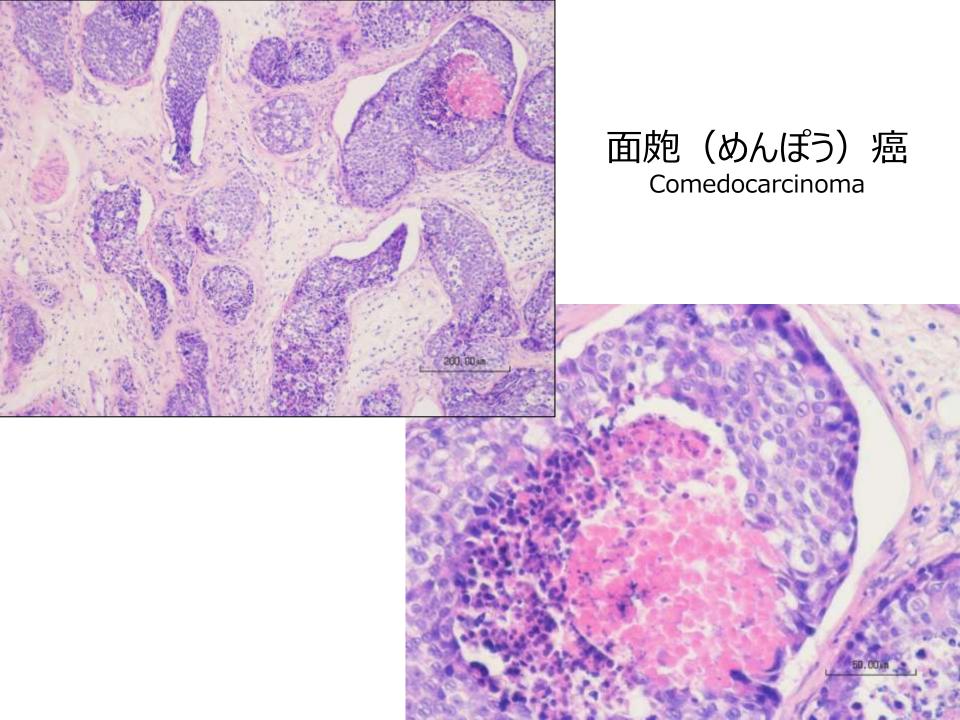
Fibroadenomatous change

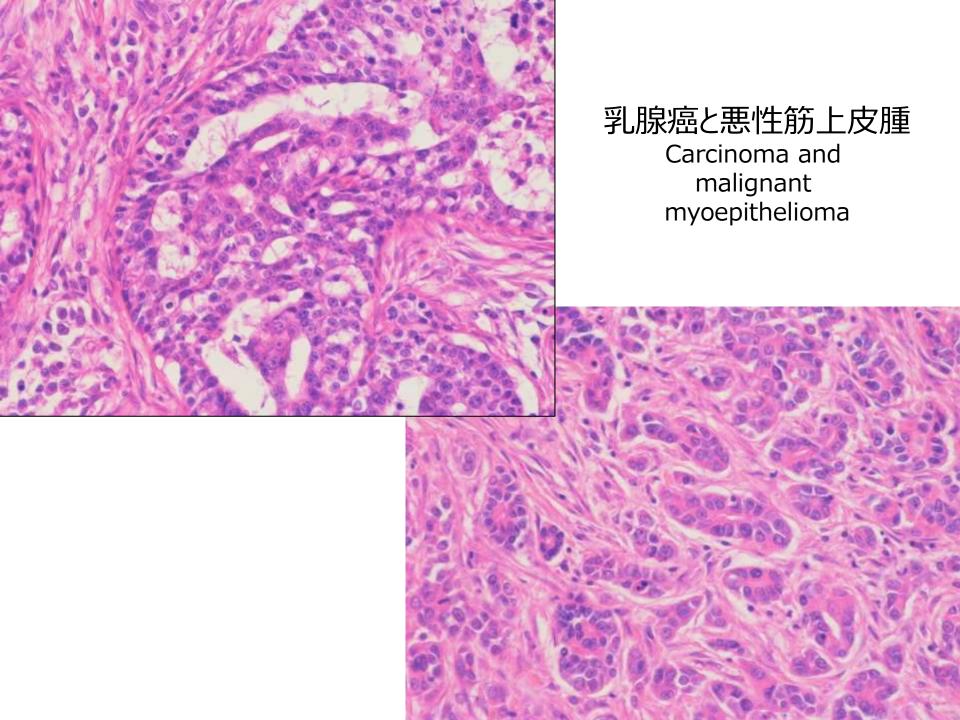
Gynecomastia

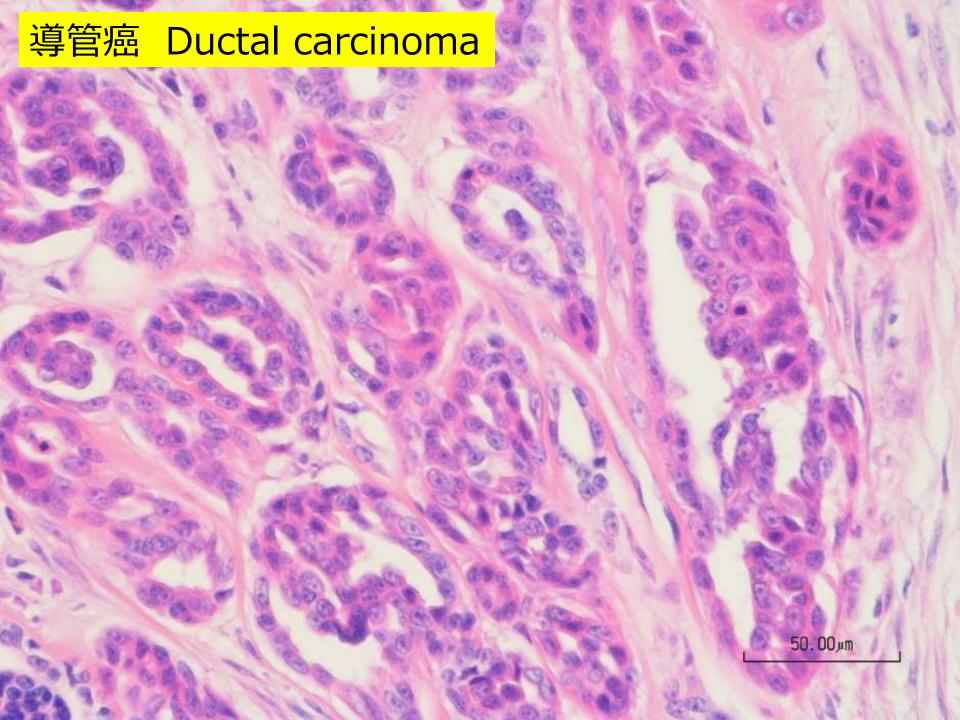
- 最新の獣医病理学や小動物腫瘍学の教科書(洋書)では WHO分類ではなく、こちらを記載!
- 猫では新分類の提唱なし

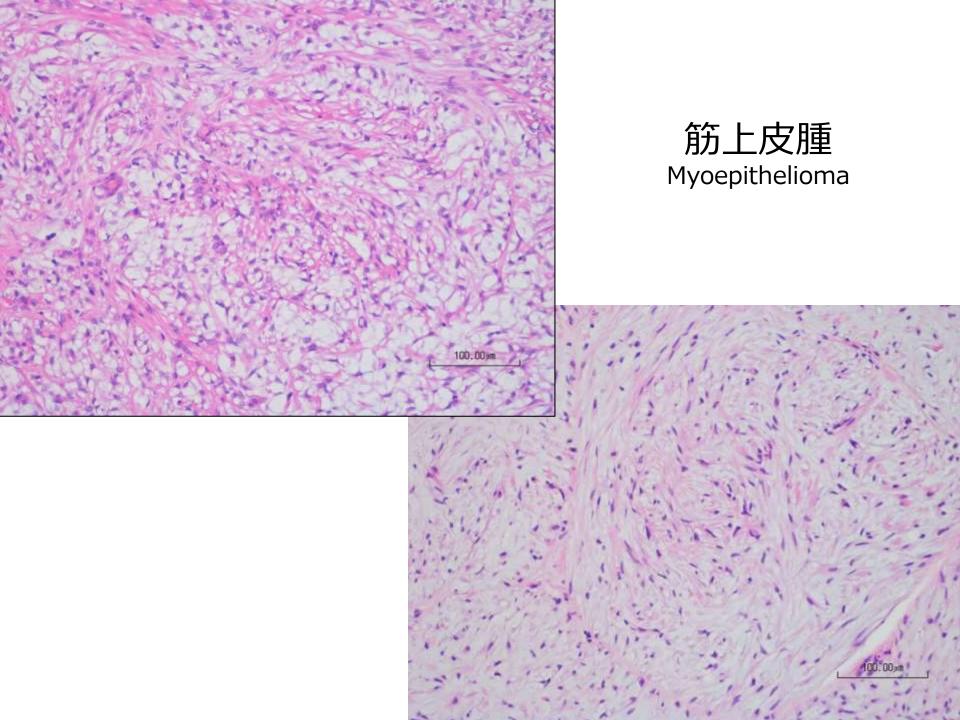
Goldschmidt et al., *Vet Pathol* 48(1):117-131, 2011.

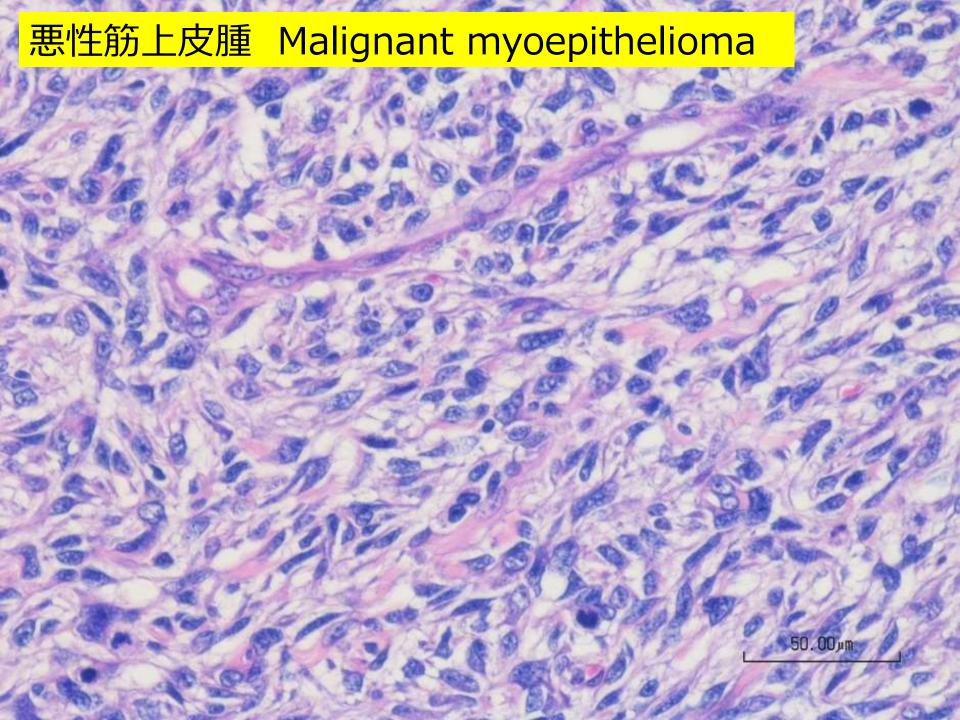






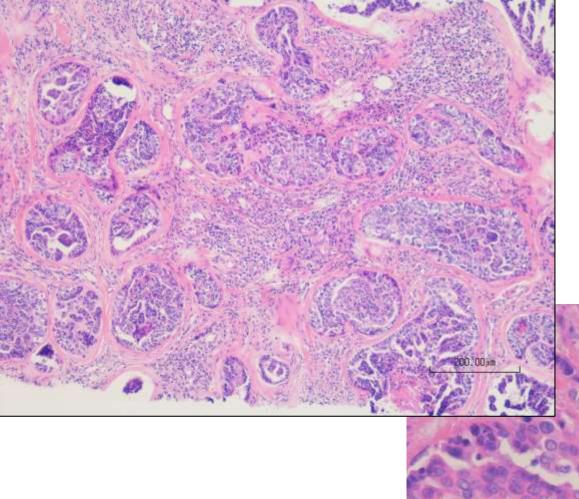




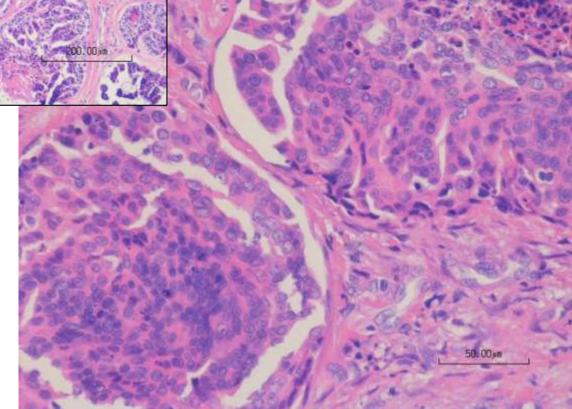


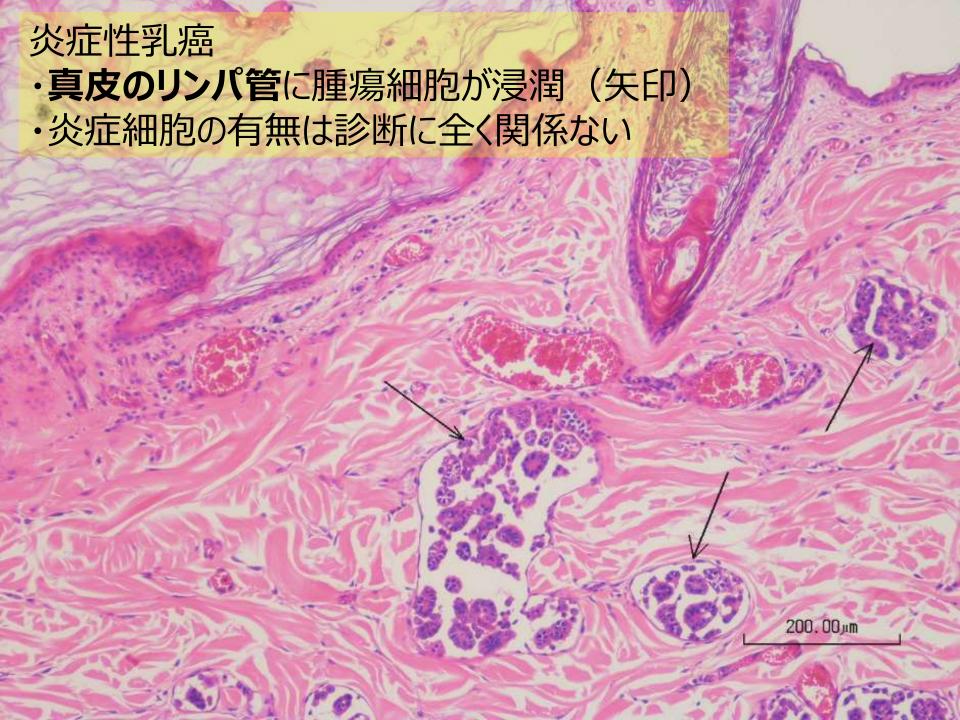


写真提供:平田雅彦先生



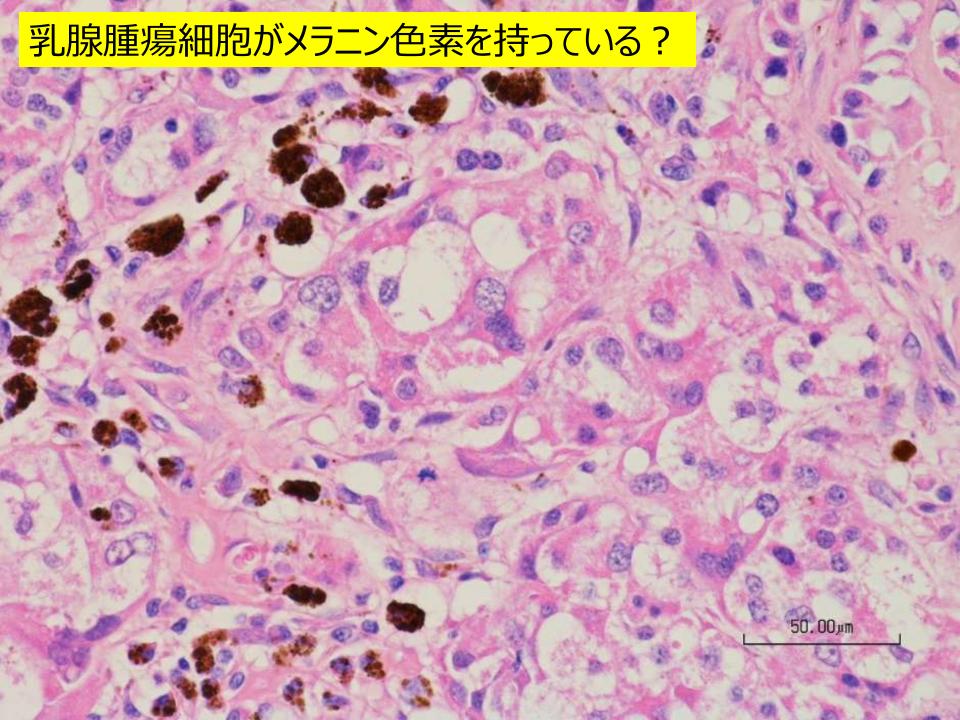
### 炎症性乳癌





## 腫瘍も「生き物」ですから…

- 乳腺腫瘍の「新種」は、まだまだあると思われる
- 組織学的悪性度と筋上皮成分の有無を的確に 臨床家にフィードバックするのが病理医の役目
- ■「新種」は積極的に学術発表すべき





# 予後判定の材料 (犬の乳腺癌)

- ●診断時の年齢
- ●腫瘍のサイズ
- 周囲の正常組織への浸潤性(境界が明瞭か)
- ●リンパ管浸潤
- ●リンパ節への転移
- ●分化の程度が低い腫瘍、特定の型の腫瘍
- ●グレード分類(注:ステージとグレードは別物)

# 予後判定の材料 (猫の乳腺癌)

- ●診断時の年齢
- ●腫瘍の量あるいはサイズ
- ●外科手術のアグレッシブさ
- ●リンパ節転移の有無
- ●グレード分類

# 「グレード」=組織学的悪性基準

人の乳腺癌のElston-Ellis (Nottingham) grading systemが元

Table 2. Criter	ia for Histologic	Malignant Grade
-----------------	-------------------	-----------------

#### 分裂像/クロマチン濃染性

	管形成	核の多形性	Mitoses per 10 HPF <sup>a</sup> /
	Tubule Formation	Nuclear Pleomorphism	Hyperchromatism <sup>b</sup>
I point Peña³ 2010年	Tubule formation > 75% of the specimen	Uniform or regular small nucleus and occasional nucleoli	0–9 mitoses/10 HPF
Misdorp <sup>9</sup> 2002年	Well marked tubule formation	Mild nuclear pleomorphism and staining	Occasional hyperchromatic nuclei or mitotic figures per HPF
2 points Peña	Moderate formation of tubular arrangements (10–75% of the specimen) admixed with areas of solid tumor growth Moderate tubule formation	Moderate degree of variation in nuclear size and shape, hyperchromatic nucleus, and presence of nucleoli (some of which can be prominent)	10–19 mitoses/10 HPF
Misdorp	Moderate tubule formation	Moderate nuclear pleomorphism and staining	2–3 hyperchromatic nuclei or mito- tic figures per HPF
3 points			
Peña	Minimal or no tubule formation (< 10%)	Marked variation in nuclear size and hyperchromatic nucleus, often with one or more prominent nucleoli	> 20 mitoses/I0 HPF
Misdorp	Few or no tubules	Marked nuclear pleomorphism and staining	2–3 hyperchromatic nuclei or mito- tic figures per HPF

<sup>&</sup>lt;sup>a</sup> Peña. HPF, high-power field.

猫でも使えそうな感触あり

Castagnaro et al., *J Comp Pathol* 119(3):263-75, 1998.

Goldschmidt et al., *Vet Pathol* 48(1):117-131, 2011.

<sup>&</sup>lt;sup>b</sup> Misdorp.

Histological Malignar	ncy Grade			
Total Scoring $(A + B + C)$		Points	Grade of Malignancy	
合計点数でグレード分類	3-5	I (low, well differentiated)		
	グレード分類	6-7	II (intermediate, moderately differentiated)	
		8-9	III (high, poorly differentiated)	

Table 4. Histological Grade and Follow-Up Categorical Variables.

		Rec/Met <sup>a</sup>		Cancer Death <sup>b</sup>		
		No	Yes	No	Yes	
Grade I	n = 29	28	1	29	0	5
	% <sup>c</sup>	96.6	3.4	100	0.0	
	% <sup>d</sup>	54.9	7.1	55.8	0.0	腫瘍の挙動に
Grade II	n = 19	16	3	16	3	
	% <sup>c</sup>	84.2	15.8	84.2	15.8	かなり
	% <sup>d</sup>	31.4	21.4	30.8	23.1	合致する
Grade III	n = 17	7	10	7	10	
	% <sup>c</sup>	41.2	58.8	41.2	58.8	
	% <sup>d</sup>	13.7	71.4	13.5	76.9	

Rec/Met is development of recurrences and/or metastases during follow-up period (P < .001).</p>

b Death due to mammary cancer during follow-up period (P < .001).

<sup>&</sup>lt;sup>c</sup> Percentage of grade.

d Percentage of Rec/Met.

#### 乳腺の上皮系悪性腫瘍(肉腫と炎症性乳癌は除く) の臨床的「ステージ」

#### 犬

ステージ	腫瘍のサイズ	リンパ節の状態	遠隔転移
1	T1 <3cm	N0	M0
2	T2 3-5cm	N0	MO
3	T3 >5cm	N0	M0
4	不問	N1(転移あり)	MO
5	不問	不問	M1(転移あり)

#### 猫

ステージ	腫瘍のサイズ	リンパ節の状態	遠隔転移
1	T1 <2cm	N0	MO
2	T2 2-3cm	NO	MO
3	T1 or T2 T3 >3cm	N1(転移あり) N0 あるいは N1	M0 M0
4	不問	不問	M1(転移あり)

Small Animal Clinical Oncology, 5th ed., p.538-556, Elsevier, 2013.

# 犬の乳腺癌を2年間追跡して得た臨床と組織学的特徴の関係

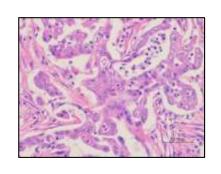
組織学的グレードと有意に相関していたのは…

- ●腫瘍の大きさ
- WHO臨床ステージ
- ●組織診断名 (Goldschmidt 2010年分類に準拠)
- ●筋上皮細胞の増殖の有無
- ●診断時の領域リンパ節への転移

Peña et al., Vet Pathol 50(1):94-105, 2012.

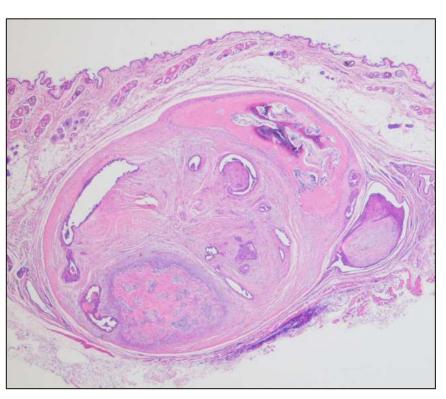
# 犬の乳腺癌のリンパ管浸潤および領域リンパ節転移を「占う所見」は?

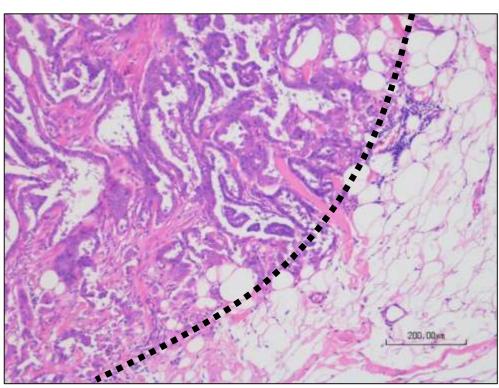
- ●腫瘍細胞の周囲組織への浸潤
- ●微小乳頭状 micropapillary 増殖パターン これらの情報を診断書から読み取れる ようにする(病理医、臨床医ともに)



●組織学的悪性基準はPeñaらの基準(分裂頻度をより詳細に数える)が若干ベター

# 「境界明瞭」vs.「境界不明瞭」





「腫瘍の周囲組織への浸潤」は低倍率の観察で直感できる

### 乳腺腫瘍における細胞診の役割

- ●細胞診での良悪の区別の正確性は19%
- ●細胞診では評価できない項目 周囲組織への浸潤性 壊死の範囲 脈管内浸潤像 分裂頻度 腫瘍細胞の基底膜の状態

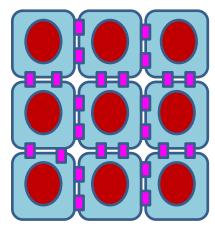
Tumors in domestic animals, 4th ed., p.575-606, Blackwell, 2002.

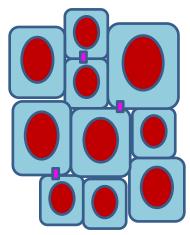
- 乳腺はもともと可変性の高い組織である
- ●細胞診をする人は組織分類を理解している必要がある

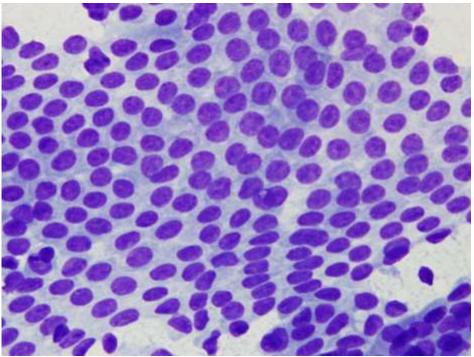
## それでも細胞診は意味がある!

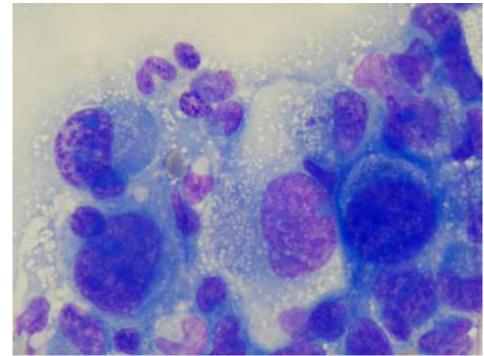
- ●細胞の量より、集塊の形態と細胞配列に注目
- ●細胞異型は強いもの「のみ」診断的価値がある
- ●混合腫瘍の基質(軟骨等)がわかることがある
- ●肥満細胞腫、悪性黒色腫など、特徴的な腫瘍の 除外が可能
- 判断に迷ったら専業の臨床病理医に依頼すべき (必ずしも確定診断ができるわけではないが)

# 細胞配列の違い





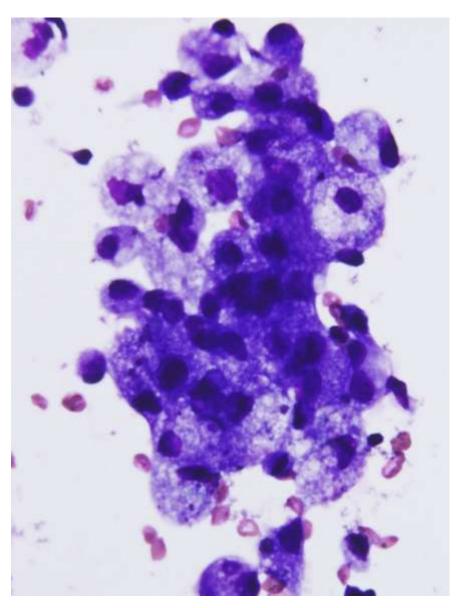




図と写真の提供:平田雅彦先生

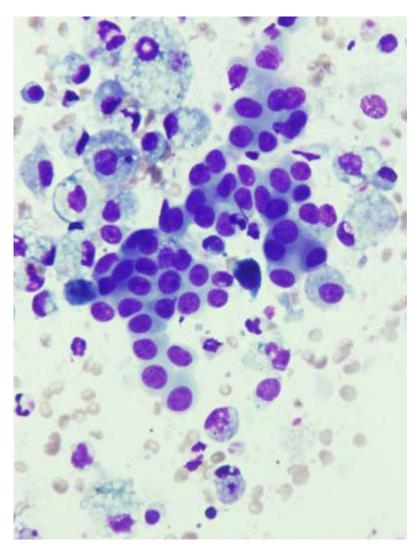
#### 乳汁中で活性化した細胞

#### 泌乳期の乳腺の変化

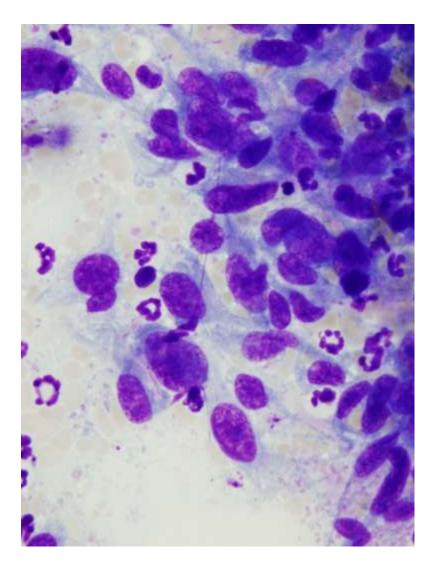


写真提供:平田雅彦先生

#### エクササイズ



単純腺腫



癌肉腫

写真提供:平田雅彦先生

# 細胞診の際、 良悪判定に役立つ臨床情報

- ●ヒストリー
- ●品種
- ●年齢
- ●避妊手術の有無や時期
- ●最終発情、妊娠状態、ホルモン療法の有無
- ●病変のサイズ、数、硬さ、固着性、潰瘍の有無
- ●増殖速度
- ●転移の有無

### 乳腺腫瘍の予後因子

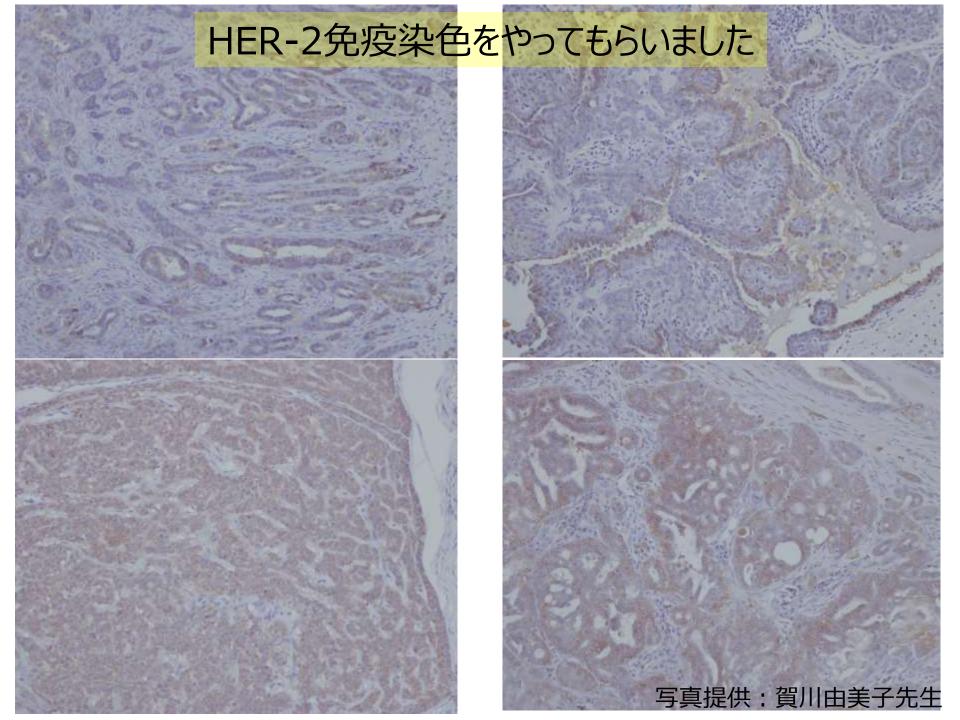
Human epidermal growth factor receptor - 2 (HER-2、別名 ErbB2/neu)

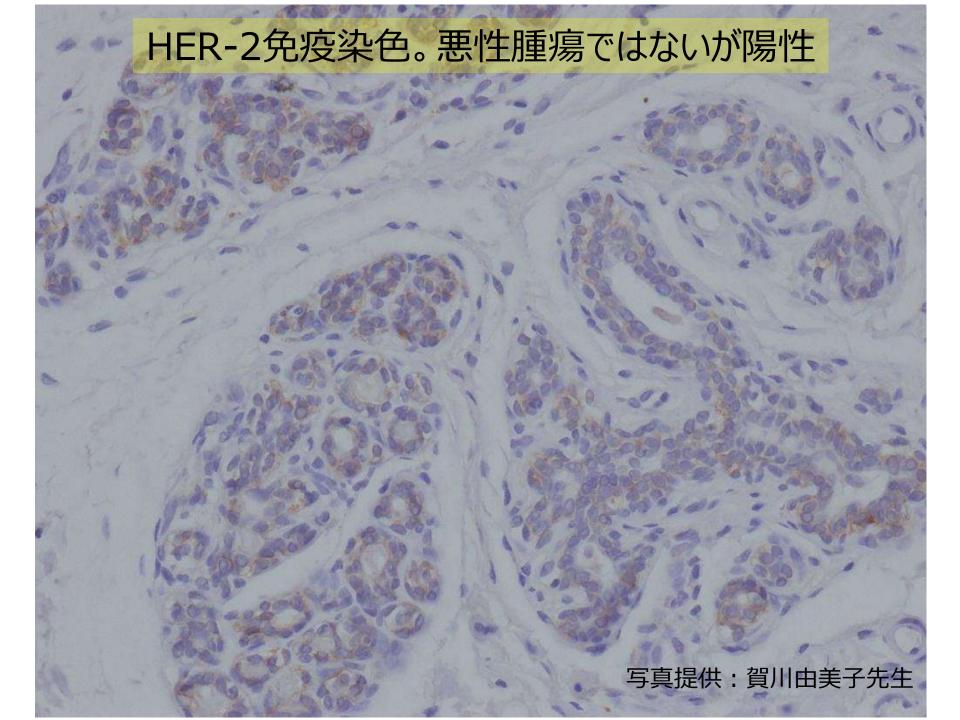
- →蛋白は免疫染色で、遺伝子はFISH法で調べる
- HER-2の過剰発現が腫瘍グレードの増高と不良予後に関 連していた

(Martín de las Mulas et al., *Breast Cancer Res Tr* 80:363-367, 2003; Gama et al., *Virchow's Archiv* 453:123-132, 2008.)

- HER-2の過剰発現は他の予後因子に関連していなかった (Kim et al., Vet J 189:318-322, 2011.)
- HER-2の過剰発現は生存期間の延長に関連していた (Hsu et al., Vet J 180:116-123, 2009.)

Miller and Mohammed, Vet J 189:245, 2011.





### 他の乳腺腫瘍予後因子

- エストロゲン受容体(ER)、プロゲステロン受容体(PR)、上皮増殖因子受容体(EGF-R)は犬の良悪の乳腺腫瘍の40-60%で陽性
- ●悪性腫瘍に混在した正常組織が陽性になっている可能性あり
- 転移病変ではこれらが陰性となることが多い
- 分化傾向の高い腫瘍> 低い腫瘍
- 複合癌> 単純癌
- 猫でも類似の傾向

Tumors in domestic animals, 4th ed., p.575-606, Blackwell, 2002.

#### 予後因子の候補 (続々出てくるが…)

• HER-3

(Kim et al., *Vet J* 189:318-322, 2011.)

- L-type amino acid transporter 1 (LAT1)
  - (Fukumoto et al., *J Vet Med Sci* 75(4):431-437, 2013.)
- 猫のHER-2

(Millanta et al., Vet Pathol 42:30-34, 2005.)

#### 乳腺腫瘍の比較分子生物学 お奨め論文

Molecular Carcinogenesis of Canine Mammary Tumors: News From an Old Disease

(Klopfleisch et al., Vet Pathol 48(1):98-116, 2011.)

Molecular Biological Aspects on Canine and Human Mammary Tumors

(Roverta and von Euler, Vet Pathol 48(1):132-146, 2011.)

#### **治療** (臨床の先生方の領域ですので控えめに) ~犬の場合~

- 外科は臨床的ステージを決め、飼い主と話し合い、**目的を明確にしてから**行う
- 炎症性乳癌は外科禁忌(細胞診や皮膚パンチ生検で 事前に評価)
- 単発腫瘤の場合は適切な(気持ち広めの)マージンで 部分摘出するのが適切
- 多発腫瘤の場合は領域乳腺切除あるいは乳腺鎖切除
- 乳腺鎖切除は腫瘍発生予防の意味もある
- 化学療法が考慮される例:大型の腺癌、リンパ節転移、 骨肉腫、炎症性乳癌

#### 治療 (臨床の先生方の領域ですので控えめに) ~猫の場合~

- ●乳腺鎖切除が第一選択 (犬とは大きく異なる)
- ●片側のみ、あるいは2段階で両側を切除
- ●リンパ節はよく探して切除すべき

### 犬猫の乳腺腫瘍 ~まとめと展望~

- 過形成から悪性腫瘍へ発展する
- 組織像が多様:診断書を読み込んでみよう! キーワード「診断名 I「分泌上皮 I「筋上皮(味方)」

「単純」「複合」「混合」「良悪」「分裂頻度」

「周囲への浸潤」「リンパ管浸潤」「リンパ節

転移」「摘出の完全性」

- ●細胞診は有用性と限界を知った上で実施。組織像にも 精通すべき
- 人間並みの分子生物学的な予後因子確立は遠いかも